

である。

久しぶりに人麻呂を読み旅人を読み、自分はいま家持の作に読み入つて居る。眼前に開かれた頁には斯ういふ歌が出てゐる。

十二日内裏に待ひて千鳥の聲を聞きて

河洲にも雪はふれれや宮のうちに千鳥鳴くら  
し居むところ無み

二十三日興につけて三首

春の野に霞たなびきうらかなしこの夕影に鶯  
鳴くも

わが宿の五十竹葉群竹吹く風の音のかそけき

この夕かも

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情かなし

も獨りし思へば

(四年十二月六日午前)

### 石川啄木君の『悲しき玩具』

單に詩歌として玩味するといふ點から見たなら、此前に出た同君の『一握の砂』の方が秀れてゐると思ふ。ひとつは是には作者自身の撰擇を経得なかつたのと、ひとつには割合に短い時間に、しかも初めから終りまで悉く病中の作であつたことなどが、その因をなしてゐるのであらう。

病中の作といへば却つて佳いのが出來さうなものだといふやうなことが多くの故人などを例にして考へられまいものでもないが、その場合がよほど違つてゐる。表面の境遇は別にしても石川君は死ぬ間際までも死ぬことを豫期してゐなかつた。あんなに永くわづらつてゐながら病氣といふものとすら靜かに面接することをしなかつた人である。實際はそのために全然捕捉せられて身動きも出來ないでゐながら、心の中では他人が病氣に罹つてゐるのだから自分が罹つてゐるのだから解らぬといふ風の所があつた。それほどまでに、内外の生活に於て彼は混亂し動搖してゐたのである。二年に渉る彼の病床は、燃ゆるやうな、しかもあてのない反抗と空想との巢であつたのである。謂はゞ、後年の彼はその乾いた巢の燃ゆるにつれて自分も空しく燃え去つたのであつた。自分自身といふものを盡さなかつた憾みがさぞ深からうとおもふと、ひとつとならず身に沁みて來る。



さうした場合に在つた彼が、前からさほど大切にも考へてゐなかつた詩歌のために大した努力を割かうわけがなかつた。彼は彼の生命の所在を、眼に見えぬ何處か他の所に認めてゐた。『悲しき玩具』は彼のさびしい空蟬うつせみの骸かみにすぎぬ。而して、あとにもさきにも實際に存在するものはその骸かみのみである。

彼が死んで行つた直ぐあとであるせるか、物を思はせらるることの強いのは『一握の砂』よりこの『悲しき玩具』である。歌に觸れて直ちにどうといふことはないが、その歌をぢつと見てゐると、ざらざらに乾いた言葉や文句の背後に打消すことの出来ぬ恐しいやうな物影が動いて来る。これは「故獨歩は、驚き度い、と云つたが私は、驚き度くないと思ふ」とこの書の終りに附けてある「歌のいろく」といふ感想文の中に彼自身が云つて居る様に、ぢいつと眼を据ゑて彼が對した人生の影であらう。あとにもさきもない不氣味な、意地の悪い此物影が『悲しき玩具』の隨所に散在してゐる。いやではあつても、我等は恐らくこの影から眼を反け得ぬであらう。

さういふ種類の歌がこの『悲しき玩具』の、いや恐らく石川君の歌の全體の特長であるだらうと思ふ。假りにそれらの歌を數首茲に引いて見よう。

そんならば生命が欲しくないのかと、  
醫者に言はれて、  
だまりし心。

かなしくも

病いゆるを願はざる心我に在り。  
何の心ぞ。

茶まで斷ちて、  
わが平復を祈りたまふ  
母の今日また何か怒れる。

やまひ癒えず、  
死なず、



日毎に心のみ険しくなれる七八月ななやつきかな。

かなしきは、

(われもしかりき)

叱れども、打てども泣かぬ兒の心なる。

時として、

あらん限りの聲を出し、

唱歌をうたふ子をほめて見る。

ひさしぶりに、

ふと聲を出して笑ひて見ぬ――

蠅の兩手を揉むが可笑しさに。

目さまして直ぐの心よ！

年よりの家出の記事にも  
涙出でたり。

旅を思ふ夫の心！

叱り、泣く、妻子の心！

朝の食卓！

よごれたる手をみる――

ちようど

この頃の自分の心に對ふがごとし。

よごれたる手を洗ひし時の

かすかなる満足が

今日の満足なりき。



庭のそとを白き犬ゆけり。  
ふりむきて、  
犬を飼はむと妻にはかれる。

何がなしに

肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ――

秋近き朝。

大上段に振りかぶらぬところに却つて意地のわるい鋭さがある……、人生が……、現代人が……、藝術がと云はぬ裏に却つて深いそれらの閃きがある。それにつけても昨今歌を詠む多くの人が幼稚極る理窟をつけて今更らしく大騒ぎをやるために、歌をやらぬ他の人々から歌といふものまでを馬鹿にされる傾きのあるのが心外でならない。

その場限りのくだらぬ愚癡や、頭からひとを馬鹿にしたやうな雑報歌が、また『悲しき玩具』の中には少くない。けれども、よし、石川君が生きてゐるたにしる、今更それらを真面目になつて責めるだけの張りが僕にはない。彼は頭からさう思つて作つてゐたのだ。また、石川君の歌は、一首々々づつ讀むべき歌でないことを附加しておく。一冊なら一冊、一生なら一生を通じての作として讀むべき種類のものである。(二年七月十五日)

### 前田夕暮君の『陰影』

なかに純粹な晶玉を包んで居る一個の石塊があるとす。前田夕暮君の歌は、その石塊の外部に當る石である。玉に深い關係がありさうで、考へてみれば何でも無い。

平凡なる人生、在るがまゝの現實といふことを彼はあまりに手輕に引受けてあまりに在るがまゝに取扱つて居る。現實といふこと、人生といふことは、たゞ眼前のそれ以上に彼にとつては何の意味でもない。あまりに容易く總てを承認して、其處に何の影を遺さぬ。もの珍しく、興味深く覺えつゝ、『陰影』一冊を讀み終つて、サテ振返つてみた時に手に捉る何もの、心に残る何ものを殆んど發見し得ぬのはその故である。



それは多少の、興味はある。けれどもそれはさきを楽しく誘惑されてゆく興味である。その作物よりして生に對する烈しい暗示、默示といふ如きものを發見するは甚しい難事、寧ろ不可能のことであらう。鋭く深く、衝動的にその歌より感觸を獲ることなどは全然望み得ない。

その誘惑の一因は、何やら手ざはり鮮かに感ぜしむるの彼の技巧の素朴の致すところである。いはゆる訥辯の能辯なるものである。夕暮は常に拙いから常に新しい、といふ下馬評なども此邊から出てゐると思ふ。

彼の主觀に、總括はある。直覺は乏しい。なるほどと思ひながら、うはの空のなるほどで通り過ぎてしまふのが、此處から出る。彼の歌に色彩はあつて光の乏しいのも此處から來てゐる。

極くあらはに現實を取扱つてゐた點に於て、石川啄木君などが前田君と同じであつた。而して前田君が多く描寫々實の丁寧な手法に據るに反し、石川君はよく空言空語になりがちの言ひつ放しの歌を作つてゐた。それでゐる石川君の方が何處となしに現實味に富み、底ぢからのある壓力を持つてゐると思はるる如きは、矢張り直覺力の多寡、眞實性の多寡に原因してゐること、思ふ。

石川君の作は、一冊または一代の作を通じて讀むことに於て意味深く、前田君のは寧ろ一首々々を讀むことに於て味がある。これは前田君の描寫の手腕のすぐれてゐることを語つてゐる。

歌集などを評する場合、ともすれば困難を感じがちのいはゆる集中の佳作なるものをこの『陰影』からは割合に易々として抜き出して來られる。次に客觀的に描き出されたうちで優れたものを引いて見る。

二人をば見たる男の眼の光野に秋草の刈りほ

されたる

黄ばみたる陸穂島を出でてきし女の肩にこほ

ろぎのとぶ

晩夏の草にいねけり野の中の踏切番の小さき

むすめは

黴よりし古外套をまとひみつかくしに手など



入れてみるかな  
 何やらむ新聞紙もて包めるを提げたる友の寂  
 しげに見ゆ  
 戸の外につきいだされし小娘の泣きなむとし  
 てこらへたる顔  
 小皺よりし小さき顔の少年が物をおもへり夏  
 草のうへ  
 物を書くわが手のくびの日に焼けて土塊に似  
 る色のかなしさ  
 彼の海の魚のさましてひとむらの青木のもと  
 に男のねむれる  
 妻がもちし古き時計のや、錆びて振れど動か  
 ぬ秋の朝かな  
 冬の朝くちなしいろの封筒のひとつ入りある  
 門の受函

冬の赤き夕日に鳥が死ぬるあり呼吸する胸の  
 ふくらみを見よ  
 夕ぐれの光をはらみはてしなく海ぞふくらむ  
 灰白色に  
 來るごとに物を忘れてかへりける君をかなし  
 く今おもひいづ  
 わが妻が女中にものをいひをれりくろばあの  
 青き葉をつみながら  
 鉛筆をけづり鉛筆をけづり物思ふ心に光ほと  
 ふれきたる  
 霧やがて霽るれば山はうすいろの藍をながし  
 ぬ日の色悲し

など、いかにも繊細に、いかにも鮮明に、針のさきで刺すやうに描かれてある。斯ういふ種類の詠  
 みぶりになると彼の歌は誠に獨得の光輝を發する。



けれども不幸にして、私は、あまりに慾が深いのかそれとも全然見當違ひかと悲しく自身を省みながら、どうしても斯ういふだけに満足して居ることが出来ぬのである。單なる寫生ではないか、巧みな構圖に過ぎないぢやないかと、感心して讀んでゐる下から直ぐ思ひ起されて來る。俳句の一面に對して感じがちの不滿までも思ひ起されて來る。

總括や概念から生れるさうですか歌の多いなか、ら鋭い主觀的色彩を帯びたものを抜くのもあまり困難でない。

このあかるき悲しみのうち新しき二人の世を  
 ばかたちづくらむ  
 何となき物めづらしき眼うつりに君を愛しぬ  
 君をにくみぬ  
 肉親の冷き心こゝろをば別にさびしと思はざ  
 りける  
 やるせなくわれとわが身のいとほしく自棄の  
 心を慰さめてるぬ

懸命に妻を叱れる愚かなる男そと知り苦笑ひ  
 する

曇り日の青草を藉けば冷たかり自愛のこゝろ  
 かなしくも湧く  
 久にしてあへば親子のへだたりの思ひのほか  
 に深かりしかな

寂しきか笑ひもせずになが顔を見てある妻の  
 顔の眞面目さ

貧しかる生活のなかに眼ざめ來し君がこゝろ  
 のやるせなからむ

素直なる心になりていぬる時冬の夜床のなつ  
 かしきかな

牛を見に霜ふみてゆく初冬の朝のこころのな  
 つかしきかな

世の常の喜びに夙く残されて靜かなりけり悲



しきふたり

等のうちには流石に何やらむ一脈のちからがあつて脈うつてゐるのを感じずにはゐるなれない。なぜ、その上に薄く被つて居る膜みたやうなものを取りのけてしまはないのだらう。

定められた紙数が盡きた。『陰影』を材料にして投げ出して見たい疑惑は、まだ甚だ多い。私の書いたこれは『陰影』評としては或は多少酷に過ぎてゐるかも知れぬ。或は全然誤解であるかも知れぬ。萬一それであつたならば私は深く前田君に謝せねばならぬ。けれども今は私は少しもさうだと思つてゐない。これは一面私が昨今自身自身の藝術を追求するために烈しい苦悶に陥つてゐることを語つてゐるのかも知れぬ。(二年十月廿五日郷里に於て)

## 添削と批評

月々私の許に集つて來る人々の歌の中よりとり出で批評を加へ添削を附して見る。

沈みゆく日を見てあれば音もなく秋はゆく

しわれ涙しぬ

第五句のわれ涙しぬがよくない。この句のために沈みゆく日を見てあれば音もなく秋はゆくらしい、といふいかにも靜かな、丁度晩秋の日の夕暮らしいしんみりした調子から、急にあわてふためいて木に竹をついだやうな具合になつてゐる。秋ゆくらしいといふうち見たところの光景印象を歌はうとならば寧ろ終りまで客觀的に歌ひ終つた方がよろしい。それを完全に歌ひ終つたときには、われ涙しぬとわざわざごちなくことならずとも却つて十分にその心持が一首の上に表れてくるのである。サテその第五句を如何するかといふ問題だが、これはその場合に於ける作者當人でなくては完全な改作は出來にくい道理である。私はかりに第四句までの調から推して、鳥もとばなくとか、風も落ちつ、とかしたらばと思ふ。この種類の主觀的客觀的の云ひかたを一首のうちに併合して歌ふ人が可なり多いやうであるが、大方は失敗して居る。見たま、を歌はうとならば初めから終りまで見たま、を、心に思ふこと感じたことを詠まうとならば、また全部その態度で行く事が一首の影を濃密にするものである。この歌と反對に、悲しいとか嬉しいとかいふことを歌つたあとで、その景物のやうにして何々し居れば秋の風吹くとか樹の葉散るなりとかいふやうな手段をとる人がまだ甚だ多い。これも駄目である。いづれ後ほどその好適例が出て來るであらうからその時また述べる。



ぼんやりと空を眺めて煙吹いて暮れゆく秋を  
味ひしかな

氣のない歌である。第一、暮れゆく秋を味ひしかなと云つたところで、その暮れゆく秋の味からしてよく解らないではないか。同じことならばその暮れゆく秋を味ふといはずして、晩秋そのものの味を充分に表はした方がよくはなからうか。

然しまたこの一首は、ぼんやりと空を眺めて、煙吹いて、といふ所、なほそのぼんやりした調子を續けて、暮れゆく秋を味ひしかなといふあたりに、何となく晩秋のとりとめのない一面の味ひが出てゐるのではないとも云ひ得る。それにしても、要するに淺い作たるをば免れぬ。

女こそいと甲斐なけれ亡き父の軍日記を取り  
出づるにも

紅の帽ぬふ手悲しき肌ざはりかゝるときしも  
亡き父おもふ

秋の夜は風吹くまゝにさそはれぬいざ窓さ、  
む濕るころに

ともすればさうですか歌になりがちな述懐歌にしては、みな相當に重みと深みを持つてゐる。小生共の所謂「まことに歌つたもの」であるが故であらう。浮華な心から生れ出なかつた、めか、言葉も調子もまことにしんみりとおちついてゐる。女こそいと甲斐なけれと無造作に詠み出でたあたりにも秋の夜は風吹くまゝにさそはれぬといとさりげなきあたりにも、言葉にみな作者の心が宿つて居る。紅の帽を縫ふとはどういふ意味か、亡き父君のそれを指すのかそれともたゞ子供の帽子かなどを縫はうとしてその場の觸覚などから急に亡き父のことを思ひ起されたのか、迷ひ易い。特殊のことを歌ふ場合などにはそのことを斷つておく必要がある。

蘇鐵の香る白堊の館にしみぐくと初秋を見る

疲れし旅人 (伊勢にて)

海濱の闇に遁れし山國の男地平に動く海は見

たれど

凝固せし蒼海のやみと我が瞳の怪しく閉ぢて

波に微笑む

柔らかきいたみに瞑る七條の灯の秋の幻を戀



恐しく大づかみなもの、云ひかたのしてある歌である。そして無理強ひに自分の歌に同感せしめようとするやうなあくどいところがある。疲れし旅人といふ大まかな言葉では、唯だ一人見知らぬ市街の白聖の館の前に佇んだ寂しい旅人の面影を思ひ浮ぶることがまことに困難である。疲れた旅人といふぼうつとした一種の概念しか頭にはうかばない。海邊の間に逃れしといふのも解らない。これも一種の概念を寫したのもかも知れぬ。地平に動く海とはいかにも肉感的な鮮かな言葉だが、そのあとが……要するにこの一首は解らずじまひである。わざ／＼凝固せしとむづかしくいはずとも同じ意味でもつと人間の匂ひのする言葉がありさうなものだと思ふ。波に微笑むもわざとらしい。その次のは、秋のまぼろしがまた大まかすぎて、捉へどころのない、透徹しないものとなつた。此等の作者はまだ極く年の少い人であるらしい。それ故、私は斯の種の缺點の多いのを敢てとがめたくない。寧ろ一種の期待を持つて接して居る。これらに以上いふやうなあらはな缺點が影を消して來たときには、他と異つた光を放つ作品とならうかと思はるゝふしがあるからである。第一はいかにも印象的であることである。第二は此等ぎこちないなかにも血の氣が溢れてゐることである。(もつとも茲に引いた三四首だけでは、此等の言葉は或は可笑しく聞えるかも知れないが)、希くば今少し自分を引き留めて歌つてほしい。あまりに逸つては駄目である。幼い概念の具體化なども止めにする方がよろ

しい。いま假りに第一の歌を改めて見やう。先づ歌はむとする印象の中心を定めねばならぬ。若し、單に旅行の途次に斯う／＼した事に出會つた、いかにも鮮かにその蘇鐵が眼に映つたといふのならば、

伊勢の旅とある白聖の館のうちに茂る蘇鐵を  
見て過ぎにけり

とでもすれば、よほど原作より混亂することなくその旅の日に於ける作者と歌はれた蘇鐵の影とはつきりと一首の上に浮んで來るであらう。若し又これがその蘇鐵を見たことによつて急に旅の日の自分の疲勞などを思ひ出したといふのならば

ふと見たる白聖の館の大蘇鐵旅倦みし身に匂  
ふ秋の日

など、置いて見たい。旅のうちに秋が立つたなアといふのならば、また多少改める必要もある。何れにせよ、先づ歌はうとする一首の核心を定めて、それに向つて純粹な透徹した心を集める心がけが必要である。漫然とたゞはしやぎ切つたのではよろしくない。

秋はよし秋はよきかな青きそら色づきしまゝ



に夕暮となる

秋行くか野菊ひとりが屋根裏に涙ににじみ夕

暮に散る

青きそら色づきしまゝに夕暮となる、といふしつかりした景情の上に置くべく、秋はよし秋はよきかなはあまりにはしやぎすぎてる。まるで手拍子を打つてゐる形である。その言葉のみが、糸の切れた凧みたやうに空に浮んでゐるのを感じませんか。びつたりと肉身が言葉に密着しなくてはよろしくない。野菊の歌も何となく粉つぽい。前と同じく充分に血の氣の通つてゐない憾みを感じざるを得ない。これは詠まうとするときの作者の心に隙のあつたためである。びつたりとその歌はうとする心持に浸つて、また他念なくそれを言葉に移したとき、斯の弊の生ずることは先づ殆んど稀であらう。そしてこの一首を仔細に調べて見ると手法の上にもだいたい缺點がある。餘りに句がきれぐになつてゐる。秋行くかで切れ、野菊ひとりが、屋根裏に、で切れ、涙に浸み、で切れ第五句に及んで居る。切れるのもいゝが、各句とも甚だだれてゐて力が薄い。屋根裏といふ言葉もちと曖昧である。屋根の上に咲いてゐるといふ意か。俗に天井裏といふ、異つた部屋に挿してある意味か。また野菊が散るといふのも無いことはないであらうが、先づ菊といへば散るといふより末枯れる姿が我等には親しいではないか。野暮なことを詮議だてするやうだが、先づその位るの心の準備はあつてほしいものである。

前の一首の一、二句を直して見ようと思つたが、此等は幾らにも直しやうはある。右云つた言葉を頭に置いて御自身改めて御らんさない。後のを改めるとなれば根本から作り代へねば駄目だし、それでは無意味だと思ふから止しにする。

いや深うひとのしのばれ泣き明す夜ごろもし

げきこの若き身ぞ

日もすがら何をなげくやこほろぎよひとしの

ぶ身に涙あらすな

よしやわれうもれ木の身となりぬとも十八の

戀わすれもえめや

いづれも調子はいゝ。而してみなうはの空で歌つてある。調子のいいのに自分からぼうつとなつて、何をいつてるのか自身でも解らないのではありませんか。勿論讀者の方には此等のなかに述べられてあるやうな愁嘆などつゆばかりも通じはしない。

しめやかに秋雨つづけばわが胸のうつろにた



まる寂寥の水

青き星まだらに散れるそらのもとわがたまし

いのひとり歩める

百舌鳥の聲聞かむと入りし林には影さへ見え

ず死を思はするかな

巧みでもあり、上品でもあるが、歌に人間の匂ひがしない。自分といふものから離れて作られた作品、あまりに幼い抽象味の勝つた作品だと思ふ。今少し自己をあげ放して——心構へを除いてから咏まれたい。

母人は憂しやけはしき眼を見はるわが許され

し女のまへに

束の間も二人が口をきくにさへ心置きたる六

月のこしかた

許されし二人の前に仰ぐにはあまりけはしき

母のまなざし

弟妹が片手にあまりおめくと亡父の命を金  
にせばめし

小姑に母は泣かされ生家より子にひかされて

よく戻りくれし

亡父のよすがも小姑多き家に嫁ぎ恙あらせず

見とどけし母

共に一家内の出来事を歌はれたものである。前の三首は若夫婦が母に對する事件と了解出来るが、あとはそれより一層こみ入つたこと、推察される。前號にも云つておいた通りこれでは自分だけに解つて他に通じない、例のさうですか、歌の一である。よし、事の道すぢだけは解つても、歌つた人のさういふ心持になど到底同感出来るものでない。單に思ふことを三十一文字中に述べ得たことを以て安心してはいけない。述べた効果の——單に述べるといふだけでは歌でないことを前號にも説いたと思ふが——如何を虚心平氣になつて自ら省察する必要がある。

幻は消えて新らし御社の年ふる杉に初日昇り



て

君が代の具現なるらん御社の高根の杉に昇る

初日は

御社の神代杉の初日影治まる御代の權化とも

見ん

千歳ふる社頭の杉の初日影君が御代とも基調  
するらん

芽出度い新年御題社頭杉の歌である。第一番目のは寓意の作であらう。つまりまぼろしといふのが「過去」であり、めでたくないものであり、初日はそれを拂ひ除き得る希望であり、めでたいものであるであらう。解るには解るが、これを讀んで我等の多くは眞實その芽出度い喜ばさしを感ずるであらうか。第一作者はどうであらう、心からさう感じて歌ひ、今でもこの歌を見てさう感ずるであらうか。邪推であつたら許して頂きたい。私はさうではないと思ふ。少くとも、どうだ、おめでたからうといふ位るの程度のものかと思ふ。而して我等讀者の方ではその幼稚、そのわざとらしさのみが目立つて、めでたいどころの騒ぎではないのである。然し、右の邪推なら云々は眞實であつて、作者はこの一首を詠み、眺むることによつて、心からこの一首に歌はれてあるやうな喜悅と祝福、乃至作

歌の満足を感じてゐるのかも知れぬ。若しさうであつたならば、私は作者に對して誠にお氣の毒に思はざるを得ないのである。即ちさうした作者の現在を我等はまことと思はぬ位るに遠く離れて眺めてゐるからである。そして、少くとも我等の知識は作者の立場より我等の立場の方をずっと高い正しいものと見ることを命じてゐるからである。斯うなれば一面歌のよしあしは第二になつて、人の問題になつて来る。即ち斯うした低い趣味、幼稚な満足に停滯してゐることをやめて、もつと高い地位にまで進むやうに自己を訓育してほしいといふことになつて来る。第二第三第四、悉く然うである。具現、權化、基調など、いふ言葉が却つて作者は得意なのであらうが、とんでもないことである。此處に細説するをやめ作者自身の再考と自覺とを促したいと思ふ。

元來私はあまり添削といふことをしません。單に批評だけ加へて、先づ内容及び修辭の上に自覺を促し、その上各自に推敲を重ねるやうに希望します。技巧もですが、先づその歌を作る心の本體を作つておかねばならぬと思ふからです。

白う寄す波打ち際の破船の上に金鏈の音悲し  
かりけり (原作)



しらじらと波寄る濱の破船の中に金鏈の音悲  
しかりけり (改作)

静かな歌です。原作の上句に少々無理もあり云ひかたがうるさかつたので改めてみました。第五句も悲しう起るとしたらと思ひましたが、どちらでもいゝでせう。

ふりかへり吾が足あとを消す波を見て恐しく  
思ひけるかな

今朝よりの風おさまりて夕まぐれ赤き波立つ

赤き波立つ

舟人よ、荒浪のなかに傾ける汝が船體の悲し

からずや

三首とも前の破船の歌と同じ作者です。いかにもうひ／＼しい子供らしい心の表れたのを悦びます。この純粹なところもちを失ふことなく、すまざず氣取らず進んでほしいといのられます。「舟人よ」の一首は前の二三の歌から續いて讀むからいゝ氣持で讀みました。この一首だけ離れてるたらいかにもわざとらしい幼稚なものに見えるかも知れません。

荒れ狂ふ海邊に立ちて泪ぐみ歌の集見るあは  
れなる子よ

これはいけません。歌の集見るあはれなる子よと云つて作者自身にはその場合の心持が充分に解るかも知れないが、他の讀者には駄目です。まがひもない例のさうですか歌です。

哀れなる逃亡の子獨り町ゆけば多くの犬のあ  
とを追ひゆく

これも右同斷。あはれなる逃亡の子と言つても何やら解らず、そのあとを犬がくつ着いてゆくのも要領を得ません。つまり、逃亡の子といふやうな文字面やまたは事實に興味を持ちすぎ、それにあまえたやうな態度で歌ふから斯ういふことになりやすいのです。それに例のさうですか歌になる資格として、いかにも表面の叙述にのみ留つてゐるではありませんか。

美しき歴史を持ちしこの人も髑髏となり何も  
云ひ得ず



同じく左様ですかの一つ。第一斯んな悟りすましたやうな理窟をいふのはおよしなさい。云つてみたところで仕様がないでせう。

花は咲く月下香チユールローズの花は咲く君忘れずや固き誓  
を

美しい文字は並んでゐるが、要するに氣のぬけた麥酒です。それに今では一寸そこらに見あたり兼ねる位るの月並ものです。作者も本氣にこんなことに出會ひこんなことを感じて詠んだのではなく、多分その場のつくりものなのでせう。

秋深し悲しき者は今日もまた森の落葉を踏み  
にゆくなる  
静けさを慕ひ泣くべう來し森のあまり明るき  
秋の午後かな  
忍び啼く鳥の瞳に漂へる不安の影よ落葉する  
森

みな相當に出來てゐます。けれど少しも生氣がない。平板に過ぎ、至つて粉つぱい。また一面のつくりものではないでせうか。

耕せる土にほかく、日の照りて十月の畑に農  
夫のかなしさ (原作)  
耕せる土にほかく、日の照りて農夫の身に秋  
はかなしき (改作)

静かな歌です。下句原作はいかにも説明がうるさすぎますので改めました。農夫はたづくりと訓むのです。

鼻を煩ひて痛くさびしう遠近の秋の哀れを戀  
しう慕ふなり

なんといふうるさい、そ、つかしい歌でせう。まるで眼をつぶされたとんぼが部屋の中で跳び廻つてゐる形です。何でも彼でも思つてゐることを(或は思つてゐるかも知れぬことを)べちやくにしやべつてしまへば新派の歌になると思つてゐる人ではないかと思はれます。



病みてあり暗き頭よと黙してふるふ夜半は冷

くく潤ふ

讀んでゆくうちに何が何やらさつぱり解らなくなつてしまひました。一體何を歌ふつもりだつたのでせう。これらはみな歌はむとする対象物とその時の自分の心とをしつかりときめないで、たゞもう無闇に先走つて歌つた、め、斯うなつたのです。畫をかくにも先づ構圖といふことをします。詠まうとする最初に當つていかにその場の心が燃え立つて居やうとも一先づ自らその心を靜かに省みて、それから言葉に移すことを心がけてはなりません。ありのまゝをふいふいと吐き出すことは却つてそのありのまゝを傷けがちなものです。

緋けば亡き面形の髣髴す君が香高しページペ

ージに

默契す君の別れの一半戸板の上のそのまなざ

しよ

君が香高しと肩をそびやかした姿も、この場合ふさひかぬる音調ですし、髣髴す默契すはお役所の

報告書と間違ひやすく、君が別れの、一しづくは一寸端唄を偲ばせます。歌はれた内容とそれに應ずる用語の用意のかりそめならぬことをよく考へてほしいと思ひます。



## 和歌評釋

## 『雲母集』の歌

専ら初歩の和歌愛好者のため本號以下引續いて和歌評釋の筆を執らうと思ふ。一はひろく和歌といふものを知らしめむため、一は之を詠む人の參考にもならうかと思ひ立つたのである。本號には北原白秋著『雲母集』の中から引いた。同書は大正四年八月の出版である。

大鴉一羽渚に黙もたふかしうしろにうごく漣の

列

大鴉一羽地に下り晝深しそれを眺めてまた一

羽來し

前の一首。大鴉が一羽渚にざいつと下りて居る、そのうしろにはあとからくくと幾重とも知れぬ漣

の列がさら／＼さら／＼と寄せては引いてゐる、といふのである。黒光りの大きな鴉がたつた一羽、物音ひとつせぬ寂しい濱にひよつこりと下りてゐる、そのうしろには遠淺になつた静かな海にきらきら光つた漣の長い列が幾重となく白い線を引いて寄せてゐる、そのしいんとした景色がよく鮮かに一首の上に現れてゐると思ふ。

後の一首。大鴉が一羽地に下りてゐる、その一羽の鴉の姿にも如何にも晝の更けたのが現はれてゐる、其處へまた一羽何處からともなく大きな鴉が下りて來た、といふのである。二羽の鴉を點出することによつて、更け沈んだ眞晝の静けさ、而かも何處となく力の動いてゐる静寂が充分に歌はれてゐる。

日ざかりは巖を動かす海蛆ふなむしもばつたりと息を  
ひそめけるかも

211  
同じく眞晝の静寂を歌つたものである。海岸の巖の上に群れてゐる無数の海蛆がうじや／＼間斷なく動き廻るためにまるで巖そのものが動いてゐるやうにも見えてゐた、が、流星にこの日ざかりには彼等もばつたりと息をひそめて動かなくなつた、巖も漸く巖の姿に歸つてしいんと静まつたといふのである。單に干乾びた静寂でなく、なま／＼しいそのの氣勢の見えてゐるのがありがたい。巖を動か



す海蛆も、と大まかに云つてあるあたりに云ひ知れぬ味ひがある。

日の光ひたと聲せずなりにけり何事か沖に事  
あるらしや

深味を説くことの困難な一首である。

じい／＼と燃え入つてゐた日光が、ひたと鳴りをしづめた、いま、沖邊では何か事が起つたのではなからうか、といふ海邊に立つての一首。日の光に別に聲のあるわけでは無いが、照りに照つてゐる時には如何にも音でも立て、照り輝いてゐるやうに見ゆるものである。其處へ突然何かの調子——作者の心の調子で、はたとその聲が断え果てたやうに思はれた、サテは何か何處かで物事でも起つたらしい、と急に眼さきの暗くなつたやうに騒ぎ立つた心を眼前のしいんとした景色を背景にして歌つたものである。餘りの静けさに驚いてわけもなく騒ぎ立つ心、さうした事はよくあるものである。それを何の説明をも用ゐずに斯う明かに歌ひ出してあるのである。

ひとり來て涙落ちけりかきつばたみながら萎  
み夏ふかみかも

杜若が皆しほれて咲いてゐる、さて／＼夏も更けたことであるわいと（夏深みかもは夏が更けたからであらうかといふ程の疑問の心を含んだ感嘆）眼の前の花に對しながら、其處にしよんぼり立つてゐる自分自身のうら淋しい姿に思ひ及んで自然に涙を零した、といふ意。

しん／＼と寂しき心起りたり山にゆかめとわ  
れ山に來ぬ

海にゆかばこの寂しさも忘れむ海にゆかめ  
とうちいで、來ぬ

おちつかぬ、護謨鞠のやうな心もちがそのまゝに出てる。言葉にも調子にもその心もち以外に不純なものが少しも附いてゐない。

かぢめ舟けふのよき日にうちむれていちどき  
にあぐる棹のかなしも

かぢめ舟はかぢめを取る舟、それが幾つも／＼ひとゝころに集つてゐて、かぢめを取るための長い棹までが一緒にきら／＼日に光りながら並んで海から上つて來ることもある、屬らかなひかりの中に



その濡れた棹どもの動くさまが如何にもあはれに見ゆるといふ一首。静かな、明かな、物あはれな歌である。

石崖いしがきに子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕

焼小焼

夕焼小焼はよく子供たちが夕焼のした時に唄ふ歌である。それをそのまま持つて來てあるのだが、それがいかにもよく調和してゐてわざとらしくない。わざとらしくないのみならず、その句のあるために夕焼小焼のした海邊の崖に多くの子供がいつしんに魚に釣り入つてゐる景色がはつきり水の滴るやうに歌ひ出されてある。

波つゞき銀のさゞなみはてしなくかゞやく海  
を日もすがら見る

波の續く限り、海には漣が立つて居る、静かな日、その漣はみないちやうに白銀色に輝いてゐる、いつまでも何處までもその漣の輝いてゐる海を終日眺め暮した、といふ一首。病床吟とあるが、いかにもその病床に在る作者のさゞなみ見えるやうだ。

音もなき海のかたへの麗らなるわが屋の下の  
さゞなみの列

麗らかや此方へ此方へかゞやき來る沖のさゞ  
なみかぎり知られず

音もなき海、浪も立たず油のやうな海、海のかたへのわが屋、いかにも廣大な海の傍に小さく住みすましてゐる小さな家を思はせる、麗らなるわが屋、日あたりのよい風も強くはあたらぬ家、その家に在つて見下せば果しもない海原は風ぎに凩いで、たゞ眼の下の石垣のほとりにのみ麗らかなさゞなみが立つてゐる、といふのである。次の一首も、よく解るであらう。

うつらうつら海に舟こそ音すなれいかなる舟  
の通るなるらむ

講釋しにくい一首。

うつらうつら聞ゆるともなく舟の行く音がする、さて／＼このうち煙つた夢のやうな沖津邊をいかなる舟の通つてゐることぞ、といふのだ。繰り返し／＼／＼てんでにひとりで讀んで見たまへ。自らこの



ゆめの世界に引き入れられてゆくに相違ない。

漕ぎつれていそぐ釣舟ふたかた二方に濡れて消えてゆ

くあまの釣舟

今まで寄り添うて漕いでゐた二艘の舟がやがて二方に分れたと思ふと、まもなく見えなくなつた、海には煙の様な雨が降つてゐるのだ。

蕪の葉に濡れし投網とみをかいたぐり飛びか翻る河

豚ぐを抑へたりけり

蕪の葉に濡れし投網を眞晝間ひきずり歩む男

なりけり

海ばたの蕪畑、その上に今うつた投網を引き上げて中の魚をつかみ出してゐる所である。血の滴るやうな、といふ言葉があるが、ほんとにこれなど血の滴るやうな新鮮と明瞭とを持つた印象深い歌である。見たそのまゝ、感じたそのまゝが、びつたりと紙の上に歌の上に、こぼれ出てゐる。

今回はこれでよしておく。

念のために云つておくが、これを見てこれはなるほど佳い歌だ、早速乃公も真似てやらうなどといふ不心得を起しては甚だよろしくない。この『雲母集』の著者の歌境などは容易に真似られるものではない。唯だ斯ういふありがたい歌の境地があるとだけ知つておいて、よく／＼その妙境を噛み味つて欲しい。さうすれば自然また其處からそれぞれの人の歌の境地が生れて來るに相違ないのである。上すべりのした読みかたや真似かたをするのは誠にその人にとつて損なことである。

もう一つ云つておきたいのは、本誌に限らないが此頃の投書家諸君の歌は多くみなこせ／＼した、氣取つたものばかりである。正直な、放膽な作は極めて少ない。さういふこせ／＼した人たちは此處に引いた歌を見て、いかにその正直で、自然で、自由であるかを——さうしてまたそれらの歌が如何に深い味ひを持つてゐるかに注意してほしいものである。

### 『桐の花』の歌

「桐の花」も北原白秋氏の歌集である。いまその一冊のなか、ら、眼についたものを引いて評釋を試みる。



春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草  
に日の入る夕

春の日の暮方、どの窓をも閉めきつた室内はまるで古い葡萄酒のやうに重く明るく澱んでゐる。机も椅子も、書棚も、厚いみどりの窓帷もみなしつとりと静まりかへつて、何ひとつ動くものも、音を立つるものもない。

たゞ一つ、籠に飼はれた一羽の小鳥が、いまは早やこの場の静寂に耐へかねて白銀のごとく鋭く透き徹つた音色で、寧ろけた、ましく鳴き立てた。椅子に身を埋めて物思に耽つてゐたこの室の主人は、驚きながらも惱ましくその小鳥の方を見あげて、鳴くな、鳴くな、愛する小鳥よ、今しも日は暮れかけて、見よ、あのやうに戸の面の春草わかぐさに眞赤な夕日が流れてゐるではないか、どうぞこのまゝ、この惱ましい静けさのなかに私を沈めておいてくれ、と鳥に向つて云ひかけた風に歌つてゐる。

この鳥が籠の鳥であるか、または血のやうに春の夕日の流れそ、いでゐる戸の面の草原で鳴いてゐる鳥であるか、明かでないが、一首の調子気分から見れば主人と同じく室内にゐるものと見る方が適當のやうである。この歌の第一の長所はその調子の張り切つてゐる所にある。いかにもその場の情趣そのまゝ、を見るやうな、惱ましい緊張がある。聲に出して歌ふ事によつて、斯んな歌は益々佳く

なつてゆく。

しみじみと物のあはれを知るほどの少女とな

りし君と別れぬ

筒井づゝ、ふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずして誰か撫つべき、といふ伊勢物語のなかの一首を想はせられる歌である。子供同志のころは何の氣もなく、たゞく仲好く遊び暮して来た、けれどもお互いつつまでも子供で居るものではない、短か、つた黒髪もいまは丈なす美しさとなつて来た、徒らにただ君よ我よと言ひ交して睦んでゐた二人の胸に今は等しく物のあはれを知る心が芽ぐんで来た、羞かしいといふ心も萌えた、お互にさきの心を讀まうとする瞳も開いた、人目を怖れる習ひもついた、その間に冷たい「時」は次第次第に進んでゆく、そしていつとはなく自身の願ひとは反對にうとくしくもなりゆいて終にはもう全く縁のない路傍の人同志になり了つたといふ哀感を歌つたものであらう。世間ありがちの出来事ではあるが、斯うしなやかに歌ひ出されて見ると、また全く別種の深い味ひが出て来るではないか。

ゆく水に赤き日のさし水ぐるま春の川瀬にや



まずめぐるも

同じく調子の勝つた一首。

赤々と春の日はさし、春の川瀬はさら／＼と淀みもなく清らかに流れてゐる。その川瀬の、あの水ぐるまの廻りやうは！

春の夕日にきらめきながら、やまず／＼もめぐつてゐる水車のすがたはさることながら、読者は更にその水車に向つて一途に瞳を輝やかせてゐる作者のその時の心をも掬まねばならぬ。

かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふひ

との春のまなざし

戀人の瞳の美しさを讃嘆した一首である。

かれこれと詮議だてしての讚美でなく、たゞもう一途に、斯くまでも黒くかなしき色やあると打ち出でた邊に云ひ知れぬ熱や力がこもつてゐる。かなしきは普通に謂ふ悲しみでなくその底に愛でいくしむ哀慕の心をこめたかなしきさである。

黒耀の石の釘をつまさぐりかたらふひまも物

をこそおもへ

美しい冷たいこの黒耀石の釘をつまさぐりつゝ、何氣なくお話をば致してゐるまする間でさへも、胸の底ひは抑へかねた物おもひに燃えてゐるのでございます、といふ一首。

言葉には出でゐないが、何となくその歌のかげにはかすかな怨みも含まれてゐるやうである。黒耀の石の釘などといふあたりにその人の若さ美しさなどもしのばれる。

寂しき日赤き酒とりさりげなく強ひたまふに

ぞ涙ながれぬ

これも戀の歌。

いろ／＼に思ひ餘つて、今は故知らぬはかなささびしさに囚はれてしまつてゐる。それを知つてか知らずでか、傍らの瓶をとりあげてたださりげなく酒を強ひる女のさまを眺めて耐へかねた涙は終に頬にあふれ出でたといふのである。

卓子か何かを中に差向ひになつてゐる二人のさまも見え、きれいな歌ではあるが、多少芝居が、つた所があつて、間違へば厭味になりさうだ。



ゆく春の喇叭の囃子身にぞ染む造花ちる雨の

日の暮(淺草にて)

時は暮春、淺草の人ごみの中にもどことなくその季節のなやましさは浸み渡つてゐる。その群衆に立ち混つてゐると、折も折、何處かの家で吹きたてた喇叭の囃子が聞えて來た、聞き馴れたそれすらも今はいかにもしみじみと聞きなされるといふ一首である。

造花散る雨の日の暮といふ背景がいかにもよく利いてゐる。生花でなくてつくり花といふのにその場やその時の情趣が残りなく表れて、姿も心も清新な歌である。

けふもまた泣かまほしさに街に出で泣かまほ

しさに街よりかへる

言つてはないがこれも暮春の歌であるやうに思はれる。そして例の調子の張り切つた歌である。この作者は實に自由に、言葉といふものを自身の心と同化させる人である。言葉そのものが直ちにその人の悲哀となり、心の韻律となつてゐる。だから、この歌など、何にも云はずに唯だ獨り聲に出して歌つてゐると、自から其時の作者の心と一致してゆくやうに感ぜられる。

廢れたる園に踏み入りたんばの白きをふめ

ば春たけにける

何といふ上品な、美しい歌であらう。つと、とある庭園に踏み入れば、そこらにいつばいたんばが咲き亂れてゐた、その花を踏みつゝ立つてゐると、嗚呼もう春も暮も暮れるのだといふ暮春の感じが油然として胸の底から湧き上つて來る、といふのである。

例によつて言葉に一分のたるみもない。踏み入ればなど、いふのも決して不用意に使はれたものではない。單に入り行きなど、いふのでなく踏み入りとあるので其時の作者の心が何かしら思ひ昂つていらくしてゐたらしく感ぜらるゝ。白きをふめば春たけにけるといふのでもそのやゝ硬い古風な云ひかたのなかに云ひ知れぬ緊張、しいんとした氣持が含まれてゐるではないか。

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこ

し畑の黄なる月の出

もろこし畑には青い幹と葉を思ふさま生ひ伸ばしてあの植物が高々と茂り合つてゐる、夏の初めの静かな夕方で、その葉さきにはもう露でも宿りさうだ、折しも月はこの廣漠たる平原のはての低い空に漸く黄ないろを鮮かにして照りそめやうとしてゐる。其處へ一人の少年が佇んでゐる、頭や兩眼



のみ徒らに大きい手足の細い、いろの蒼い病兒である。晝間からたつた獨りでしきりにほそく／＼とハモニカに吹き入つてゐたのであつたが、斯う既う夜にならうとするのに一向氣もつかぬげに尙ほしんみりと幼い單調な樂器を唇頭から離さうともしないといふ叙景の歌。同じことでもたつぷりと新味が湛へて歌はれてある。

太葱の一莖ごとに蜻蛉ゐてなにか恐るゝあか

き夕暮

葱がさかんに生ひ伸びて、廣い畑はまるで箱庭の林のやうになつてゐる。その葱の青い穂さきに殆んど必ずのやうにそれ／＼蜻蛉どもがとまつてゐる。人もゐず風も吹かぬのに、何ものをか恐るゝ、ごとく、ふい／＼と皆が互にその穂さきからまひ立つてはまた來て止る。赤い夕陽は今しもその畑に油のやうに濃密な光線を溢るゝばかりに投げてるる。

青き果のかけに椅子よせ春の日を友と惜めば

薄雲のゆく

木立の深い庭園に、青い果實をつけた一もとの樹があつた。そのかけに椅子をよせて、親しい友と

共に言葉も少く暮れゆく春を惜みかなしんでゐると、木の間に透いて薄い雲がしら／＼と盡きず／＼と流れてゐる。

啄木鳥の木つつき了へて去りし時黄なる夕日

に音を絶ちしとき

とある一瞬の印象が、甚だ鮮かに歌はれてある。

大きな老木の、幹の皮さへ朽ちかゝつたのに一羽の啄木鳥が來てしきりとその木肌をつついてゐた。そして既う充分にお腹も満ちたのか、或は早やその蟲を啄み盡したか、ふいとその幹から飛び立つた。とび立ちながら一聲或は二聲、短く鋭い聲をふり立て、啼き去つた。折しも其處ら老木の立ち並んだ木立には今しも沈まうとする夕日が一面に黄く散り布いてゐた、といふのである。

單に其場の景色や出來事を、短くありのまゝに述べたゞけで、靜かだとも寂しいとも美しいともいつてゐない所に却つてそれ等いろ／＼の複雑した情趣が力強く浮んで來てゐると思ふ。さういふ場合だけに少しも冗漫な口調を用ひてない。きつ／＼の木つつき了へてといひ、去りし時、絶ちし時といやに重複してゐるやうであるが、うまく疊みかけて云つてゐるので却つて緊張を覺えしめてゐる。



草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝  
て削るなり

萌えたつた若草の上に寝ころんで赤鉛筆を削りだした、ほろ／＼とその柔かな草の上に散つてゆく赤い粉末のあまりにも美しいのに心を惹かれて、今はもうたゞそのためのみにせつせと鉛筆を削つてゐる、といふ一首。

うつつなくその草にその粉に心をとられて、ぢつとしてはゐられないやうな氣持になつた時の作であらう。序詞見たいにしてこの歌の初めに作者自ら

草に寝ころべ

草に寝ころべ

としてゐる。

干葡萄ほしぶどうひとり摘みとりかみくだく食後のほど

をおもひさびしむ

卓に獨り、食を終つた。たべるともなく摘みとつて干葡萄を噛み砕いてゐる間に、故知らぬさびしさが早やひそ／＼と身に萌えそめて來る、といふ若き日のさびしさを歌つたものであらう。

カステラの黄なるやはらみ新しき味ひもよし  
春の暮れゆく

この作者は今まであまり他の歌つてゐなかつた食物についてよく歌つてゐる。そして何れも新味に富んでゐる。新しいカステラ、やはらかなカステラ、うまい美しいカステラ、獨り、(と斷つてはないがそんな氣がする)しみ／＼とその菓子を愛で味つてゐる若者、うつとりとしみ／＼と春の暮れて行かうとする折からの季節、それらを噛みしめてこの一首を味はつてほしい。

いつしかに春の名残となりにけり昆布干場の

たんぽぽの花

或る海邊にての作。

ぶら／＼と散歩の途か何かに、と或る荒磯の昆布干場に行きあつた、ふと見るとそこらに二つ二つとたんぽぽの花が咲いてゐた、お、もういつかこれが春のなごりとなつたのかなアといふ意味であらう。單純な歌ではあるが「桐の花」の中でもこれなどは最も私の愛誦する一首である。昆布のとれるところといへばどうせ荒磯である。その干場の砂の上か岩の上か、いづれにせよとげ／＼しい荒砂か、



眞黒な岩かと見ていゝであらう。其時昆布が干してあつたか如何かはとにかく、いづれ昆布のきれや貝がらがそこらに散亂してゐる所に相違ない。渚には可なりな浪が断えず碎けて居り、霞みながらも沖の方には大きなうねりが動いてゐる。其處へぼんやりと立ち入つて見ると、これはまた思ひがけなく黄な花が砂をあびてそこ此處に咲いてゐた。過ぎ去つた春を思ふころに燃えてゐる眼にその二三の可憐な花が、ほんとにどんなに強く映つたことであらう。いや／＼、斯ういふ冗い説明は不要としても、何といふしんみりとした、底さびしいこの一首の調子であることぞ！

野薊に觸れば指や、痛し汐見てあればすこし

眼いたし

歌の初めに、春愁極りなしといふ序詞を添へてある。前のたんぼほの一首に續いて同じ時に出來た歌らしい。

同じく海邊、おなじくゆく春の惱みの天にも地にも滲み渡つてゐる季節、やるせなさに野薊に觸つてみれば指が痛く、流れて止まぬ沖邊の汐の光れる方へ眼をうつせば眼が痛むといふ、身の置きどころのないやうな場合の歌である。

洋妾の長き湯浴をかいま見る黄なる戸面の燕  
のむれ

洋妾といへば、何かは知らず寧ろ氣味のわるいほど一種妖艶な女性を我等にしよばせる。その妖艶な放縱な一女性がいつまでも／＼湯殿から出て來ない、微かに／＼湯を使つてゐる音のみは聞えてゐる、ゆく春のゆふぐれがたのどんよりと、黄に澱んだ日光はその湯殿を包み罩めて照つてゐる、その日光のなかを、湯殿のめぐりをあれあのやうに燕の群がとんでゐるといふ意味であらう。かいま見ると云つても別に燕が覗いてみるわけではあるまいが、宛らそのやうにつうい／＼と軒近くとんでゐる敏捷な美しい小鳥をよく活かすためにわざと斯う云つたものであらう。

ものづかれそのやはらかき青縞のふらんねる

着てなげくわが戀

戀づかれとでも云はうか、今はもう戀しい悲しい心のほかに、何かは知らず物憂いやうな思ひがいつとしもなく身に添ふて居る、その柔らかな倦みごち、それは丁度いま私の着てゐるこの青縞のふらんねるにも似たやうな、といひながら尙ほ際知らず物思ひに沈んでゆく。



惱ましく廻り梯子をくだりゆく春の夕の踊子  
がむれ

踊りつかれて、身もたよ／＼と汗ばみながらかき嚙んで、物々しい螺旋梯子を下りゆくうら若い舞  
妓の一群、——晝の踊りはいま終つたのである。

たゞ飛び跳ね踊れ踊子現身うつしみの杳やうのつまさき春

暮れむとす

現身うつしみの杳やうのつまさき、——狂ほしくも踊りに踊つて早やつまさきはぢり／＼と痛むがまでになつて  
きた、もつと／＼踊れ、痛め、それ、お前の踊つてゐるつまさきから、それ、ちろ／＼と春は逃げて  
行かうとしてゐるではないか、といふほどの意か。飛び、はね、踊つてゐるやうな一首の調子は惻々  
として我等にまでその爪先の春の痛みを傳へて来るやうである。

くろんぼが泣かむばかりに飛び跳ねる尻ふり

踊にしくものはなし

泣かむばかりに現なく、たゞひたすらに踊り入つてゐる一人の黒人、光るやうなその黒人、その黒

人の踊りにまさる物のあはれがまたとあらうか、といふ歌か。即興の、單に一途に興じ去つた歌であ  
らう。けれども、愚かな、眞黒な一人の男が何かの情にかられて現なく埒もなく踊り狂つてゐるその  
さまをふいと眺めて、くろんぼが泣かむばかりにとび跳ねる尻ふり踊にしくものはなしと、歌ひいで  
たあたりに云ひ知れぬ人間の哀情が溢れてゐると思ふ。

わが世さびし身丈みたひおなじき茴香ういぎやうも薄黄うすきに花の

咲きそめにけり

い、歌だ。うつら／＼とわが世さびしく思ひ沈んでゐるものに、この茴香もいつしか花をつけて來  
たといふ歌であるが、單にさういふだけでなく、日ましに丈の延びてゆくあの青い晩春初夏の草、——  
それを日毎に眺めてゐた作者——とかくするまに、その茴香はいつか自分と同じ背丈にもものびて來て、  
たうとうあの様な花が見えそめた、見るもの聞くもの、いよ／＼我が周圍はさびしくもなります、  
といふやうな複雑な意味がこもつてゐると思ふ。

『桐の花』の歌を引くことをば、以上で止めておく。以上數首引用した歌によつて、その作者の詠み  
ぶりのどんな風であるかは、大方に推察のついたこと、思ふ。目に見、耳に聞き、手に肌を觸れたそ



のまゝをたゞ只管に詠みいでてゐるところに、冒す可からざるちからが生じて來てゐるのである。この人の作には一切もう理窟もなく思索もなく、切端迫つたその場の感情や、身に觸れて出る一途の官能によつて常に歌が生れてゐる。さうある事は元來人間本來の姿であつたがためにその詠出しの眞に迫つて出て來た時の作には、實にもう註釋のつけやうもない。所謂押しも押されもせぬ立派なものとなつて出て來る。極端な複雑と極端な單純とが一緒になつたやうな形である。それが一步誤つて多少強ひて作爲せられたときの作となると、いかにも幼稚な、わざとらしい、厭味のものとなつてしまふやうである。茲にはその佳作と認められたものゝみを抜いた。

### 『啄木歌集』の歌

『啄木歌集』は故人石川啄木君の遺稿中その短歌を輯めたものである。明治十八年に生れ、同四十五年の春肺を病んで東京小石川で亡くなつた。幼い頃から人なみすぐれた秀才であつたと聞く彼の短い一生は、多く不遇の裡に過ぎてしまつた。曾ては稀有なる天才とまで地位ある人々に讃へられ、やがては田舎の小學校代用教師、または地方新聞の記者などに不本意の日を送りつゝ、亡くなる時は某新聞の校正係といふ地位にあつて永久に眠り去つたのである。さうした境遇に在つて歌つてゐた彼の

歌が、果してどんなものであつたか、次に數首を引いて見よう。要するに彼の歌には、世に謂ふ歌の趣味とか歌ごころとかいふやうな似而非高尚優美な所などは少しも無かつた。寧ろ、眞の無垢玲瓏な人生といふものが歌といふものゝ形をかりてその姿を現はしてゐるといふが適當であらうと思ふ。

新しき明日の來るを信ずといふ

自分の言葉に

嘘は無けれど――

いつまでも、斯のやうに不本意な、濁り澱んだ苦しい境遇にぼんやり佇んでゐる自分では決してない、生れ代つたやうな新鮮な、光り輝いた未來が來るに違ひないと信じてゐる、さういふ自信だけは確かに今のやうな自分の身體の裡にもひそんでゐる、が、一體何時になつたら、その信じてゐる新しい明日の日が來るのであらうといふ、永い間の過去の經驗をふり返つて絶望ともない絶望を歌つたものである。露骨に輕卒な叫をあげず、悲憤慷慨口調でそれを歌はず、殆んど他を對手にせぬやうな、獨りごとでもいふやうな態度のなかに、却つて云ひ難い深刻な苦痛が溢れてゐる。

新しきからだを欲しと思ひけり



手術の傷の  
痕を撫でつゝ

前の一首をや、具體的にして云つたやうな一首である。もつとも、前の一首の出來た時とこの一首の出來た時との間には二三年の間隔があつた。この歌は彼の晩年に腹膜炎で切開手術を受けた後の作である。

例によりまことに何氣ない風に歌つてある。ひよつと見ると自分の身體には大きな傷が出來てゐる。噫、傷などのない立派な新しい身になりたいものだといふのである。表面は唯それだけだが、この作者の作だけに種々な事を思はせられる。自分の心は過去の種々な苦しい境遇から濁り切つてゐる、それをもとのやうに澄ましたい、生れ代つた様な身になりたいといふ前の一首に對して心ばかりかたうとう身體まで斯んな有様になつてしまつたといふ聯想が我等の心に浮ばぬであらうか。一度ついた傷は墓に行くまで我等の身體に消えはせぬ、段々頰れ澱んでゆく我等の生命、我等の心を眺むる時によく何氣ないさまで此等の歌が讀めるであらうか。

何處どこやらに澤山たくさんの人があらしひて  
引くごとし

われも引きたし

實に説明のしにくい歌である。何處といふことはないが、其處等中いつばいに人間が群つて、大騒ぎで鬨を引合つて居るやうだ、とてもちつとしては居られなくなつた、俺も馳け出して行つてその鬨引きの仲間に混らうか、といふやうな一首である。如何してこの一生を送つて行つたらいか、あ、でもない斯うでもない、いつか眼の前もうす昏くなつて來たやうなわれと我が身を持ってあますやうになつて來た——ところへ、ふと氣がつけば何も解らぬ人間どもがたゞもうがやくと血眼になつて盲目蛇のやうに騒いでゐる、あ、俺もあ、していつ、そのこと何でも彼でも盲目滅法に駆け出して行つて見やうか、といふやうな、複雑した名狀しがたい煩悶や絶望が歌はれてゐるのだと思ふ。鬨といふのを無目的な人生とでもいふやうなもの、象徴だと云へば云へぬでもなからうが、そんな事を云はれたらこの作者は屹度例の冷たい苦笑を漏すであらう。

高きより飛びおりるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

高い、斷崖の頂からでもとび降りるやうな心持で、この自分の一生を終る方法は無いものかなア、



といつた一首。

うよく、じめくと、まるでうち蟲同然の生活をしてゐるのがつくづく厭になつた、おなじくばあの崖からでも飛び降りるやうな張りつめた氣でこの短い一生を送つてゆく法は無いものかといふのである。

何がなしに

頭のなかに崖ありて

日毎に土のくづるるごとし

何といふことはないが、この頃の自分の頭のなかに一つの崖があつて、それがほろりと間斷なしくづれてゐるやうだ、との一首。

次第に衰へてゆく自分の氣力生力を眺めて歌つたものと見て、であらう。

かうしては居られずと思ひ

立ちにしが

おもて戸外に馬の嘶きしまで

いかにも疲れ果てた、もう世のなかのありとあらゆる事がらを知つてゐる、なるやうにしかかなりはせぬといつたやうな作であると思ふ。

いろ／＼とツイ考へ込んでしまつた、あれを思ひこれを思ふと、とてももうぢつとして坐つては居られなくなつた、どうにかせねばと、惶しく身を起したが、サテどうすると云つた所で今さらどうなるものでもない、と、また再びぐつたりと身を投げるといふ一首であらう。そゝくさと身内も熱して立ち上つたとき、丁度戸外を通りが、つたものでもあつたらう、一聲高く馬が嘶いた、それを聞くと同時にまたひいやりともとの自分に心が歸つてわれとわが身を冷笑するやうな風にぐつたりとなつたといふので、馬に別に大した意味があるのではない。

はたらけど

はたらけどなほわが生活樂にならざり

じつと手を見る

一首の意味は誰にでも解ること、思ふ。作歌の技巧の上からこの一首を少し解剖して見やう。此作者に限らず、秀れた作者の作は皆さうであるが、歌の様な短い型のものに於ては、餘程心の調子を一途にして、散漫にせず、純一な心で歌はねば出來た歌のちからが甚だ弱い。花を詠じ鳥を歌ふ場合



などの作は、何しろ既に一つの定つた對象が向ふにあるのであるから、まだしもそんな心地になり易いのであるが、「石川君の作は多く唯だ自分といふもの、生活といふものをのみ主題として歌つてゐる。自分といひ、生活といひ、何といふ茫漠たる、大きな、漫然たる題目であらう。それを彼は常に斯の如くに緊張した一首々々として、從來寧ろ「高尚優美」の代名詞位にしか考へてゐられなかつたもの、上に盛つてゐるのである。」この一首にしても、唯だ漫然と概念的に貧しいとか苦しいとかいふことを考へてゐるのでなく、しみじみとそれを感じ味ひ、それに對する抑へがたい自分の衷情を述べてゐるのである。而して、單に幾ら働いても自分の暮しは樂にならぬといふやうな事だけなら世間で誰しもよくいふことだし、聞く方でも、さうですな位にしか感じてはゐないのであるが、この一首のそれと異つて寧ろ氣味の悪い位の沈痛な印象を讀者に與へるのは、主として、結句の、じつと手を見るといふ一句にあるかと思ふ。石川君は上にいふ如く思索的方面の才能の秀れた人であつたと同時に眼前に起る事象を直ちにそのまゝ寫生して作物の上に移す技能に、極めて優れた腕を持つてゐた。それも強ひて「寫生」をあさらうとする卑しい心でなく、自然に起り來る事象をよく鋭く認め得た人であるのである。或時のこと、ふとした考へから幾ら働いても、自分の生活ばかりは樂にならぬやうではあるがと思ひ入りながら、見るともなく自分のやつれ果てた手に眼が注いだといふ所に何の理窟も説明もない恐しい力があるのである。自分の手は自分の働きをする唯一の道具である、それが故に、

その場合、自分の手に見入つたといふのでは同じ事でも必ずこの一首より得たけの感銘は得られな  
いと信ずる。

よごれたる手を見る

ちやうど

このごろの自分の心に對ふが如し

これは前のよりや、淡い味ひではあるが、捨て難い。何といふよごれ果てた手だ、と不圖自分で自分の両手に驚いて見入りながら、いつか知ら心のうちでは、ちやうど此頃の自分の心と同じぢやないか、と動くともなく動いて來る感じを禁めかねてゐるのである。

今夜こそ思ふ存分泣いてみむと

泊りし宿屋の

茶のぬるさかな

ゆつくりと思ふ存分泣いて見たいと——思ふ存分われとわれ自らに親しんで見たいと——夙うから願つてゐた、漸くその願ひが届いて、いそぐとけふ唯だ獨りやつて來たこの宿屋の、この茶のぬる



さは何といふことぞ、と事ごとに自分の願ひの頽れてゆく、いはゆる一種の幻滅の悲哀を彼は此處でも歌つてゐるのである。宿屋といふのは、自分の宅は尙更ら、友人の宅でもいやだ、誰ひとり知る者も無い旅館の一室に誰ひとり氣兼ねなく………といふ意味であらう。

## この日頃

ひそかに胸にやどりたる悔あり

われを笑はしめざり

事々しく打ち出でて云ふ程のことでもないが、この頃自分の心の奥深く自然に湧き出でたひとつの悔がある。——噫、あゝせねばよかつた、あれは全く自分がわるかつたと思ふその心が、事につけ折にふれ眼の前に現れ出て、今は氣輕に笑ふことをすら許されなくなつたといふのである。

誰にもよくある事である。大概の人はこれを多くは自分で自分の心を瞞着して、その悔を悔とせずに通してしまふ。然しこの作者はさうでなかつた。自己に對して何處までも生眞面目な性格はまた此處にも窺はれるであらう。

眠られぬ癖のかなしさよ

すこしでも

眠氣がさせばうろたへてねる

何だか、人間生活のいかにもどん底にある一つの現象を見せられるやうな歌である。そして斯うした生活がいまはずつと一般になつて來てゐるのだから仕方がない。

あまりに身の衰へたためでもあるか、心は徒らに尖つてきて、眠らうくとつとめてもなかく、眠られぬ身となつてしまつた、これでは益々よくないぞとあせればあせるほど却つて目は冴えてくる、さうした場合、少しでも眠氣のさす時があれば、何を捨て、おいても先づ一眠入することに急ぐ癖がついてきたといふのである。その睡眠といふのが、何だか方今の我等の生活にとつて、いかにも尊い、はかない薬でもある様に思はれるではないか。同時にまた斯うした一つの出來事を捉へて、さういふ場合の一人間を十分に現はしてゐる作者の手腕をも認めねばならぬ。

いと暗き

穴に心を吸はれゆく如く思ひて

つかれて眠る

眞暗な、底も知れぬやうな穴があり、その穴の底へ底へと次第に自分の心が吸はれて行くやうで、



何とも云へぬ苦悶と不安とに身をもがいてゐたのであつたが、今はもうもがき勞れて、いつともなく重い眠りに沈んでゆく、といふ歌。

目さまして直ぐの心よ

年よりの家出の記事にも

涙出でたり

これはまた前の二首と違ひよき睡眠の後を歌つたものと思ふ。

久しぶりにゆつくりとよく眠つて、いま漸く眼がさめた、雨に洗はれた春さきの草木で、もあるやうに珍しく心がはつきりと鮮かになつてゐる、——其處へ、讀むともなく讀みかけた新聞の記事のなかに或る老人の家出の事を記した一項があつた、平常であつたならば他の多くの記事と共にたゞ一目に見過してしまふ事であるのだが、折も折、美しく澄み切つた今のこの心には、それがいかにもしみじみと身に沁みて、思はずも涙を落してしまつたといふのであらう。沙漠のなかの二本か三本の青々した植物のやうにも、この心が尊まれるではないか。

人間のつかはぬ言葉

ひよつとして

われのみ知れる如く思ふ日

これも一寸前の一首に似てゐる。一般の人間社會のまるで知らない言葉を、今日は何やら自分獨りが知つてでもゐる様だといふのである。言葉といつても單なるそれではない、今の一般の人たちの思ひも及ばぬ大きな事實、人間界の底の底の深い眞實、それを私獨りが知つてゐる、とても云ふのであらう。斯うした場合に於ける一瞬間の彼の心の光をよく想像することが出来ると思ふ。然し斯る場合にも彼は我を忘れて思ひ昂ることの出来ない人であつた。われのみ知れる如く思ふ日といふなかには例によつて多少とも自分を嘲笑ふやうな心が動いてゐるのではない。人間のつかはぬ言葉とさりげなく云つたなかには、また心にくい深い味ひが籠つてゐる。これを私が註釋したやうに、ぐつと露骨に打ち出したならば、それこそ何の味も匂ひもないものとなつてしまふ。常に極く無雜作に歌ひ出でた彼にはまた別に自らなる用意があつた。

まれにある

この平らなる心に

時計の鳴るもおもしろく聴く



自分にしては極めて稀なこの静かな平らかな心には、き、馴れてゐるあの時計の音までがいかにも興味深く聴きなされるといふのである。

深い青海の底に静かに一疋の魚が尾鰭ををさめてちつとしてでもゐるやうな、静かな可懐しい印象を受けて来る。我等讀者は斯うした場合にあつた作者を想像することによつて、自づとわれとわれみづからを可懐しむ心が湧いて來ると思ふ。

空家あきやに入り

煙草のみたることありき

あはれたゞひとり居たきばかりに

通りが、りの空家に入つて、じめ／＼と薄暗いなかでゆつくりと煙草を吸つたことがあつた。あゝ、暫くなりとも自分獨りであるたいばつかりに、といふのである。

よく笑ふ若き男の

死にたらば

すこしはこの世のさびしくもなれ

なんとといふよく笑ふ男ぞや、あんな男が死んだなら、少しはこの世が静かにもなることか、といふひとを嘲り自分をはかなんだ、軽い一首である。

氣の變る人に仕へて

つくづくと

わが世がいやになりけるかな

斯うせよといふからさうして居れば、いつのまにやらまた彼かせよといふ、あゝ、せい斯うせいと一體これは如何したらいいのだらうと、同じくすら／＼とした一首。

人ごみの中をわけ來る

わが友の

むかしながらの太き杖かな

石川君には斯うした即座の寫生の歌がまた可なり多かつた。大上段に振りかぶらぬなかに甚だ捨て難い味がある。

群集のなかを押しわけてやつて來る友人の——大方停車場に出迎ひにでも行つてゐた時の作であら



う——オヤ／＼奴さん、昔ながらに太い杖をばついでる、といふのである。破顔一笑して舊友と相  
見る心持があり／＼と目に見えて来る。

船に酔ひてやさしくなれる

いもうとの眼見ゆ

津輕の海をおもへば

彼の津輕の海を思ひ起す毎に自分の心にうつるは妹の事である。船に酔ふていつもと違つて、まことに優しくなつてゐたあの時の彼女の瞳のことである。

見も知らぬ女教師が

そのかみの

わが學舎の窓に立てるかな

曾て自分等の學んだ事のある學校の前を通りかゝつてみれば、見も知らぬ一人の女教師がその窓邊に佇つてゐたといふのである。久しぶりに故郷などへ歸つて斯うした事に出會つた場合の心持がそれとなく一首の裏に動いてゐるではないか。

君に似し姿を街に見る時の

こゝろ躍りを

あはれと思へ

女へあて、詠んだものであらう。斯うして毎日街を歩みながら、時としてあなたによう似た女を見ることがある、その時々はずとすると、この心躍りをあはれと思つて下さい、といふ一首。  
戀の歌としては先づ珍しいおちついた寂しい一つであらう。

そんならば生命が欲しくないのかと

醫者に言はれて

だまりし心

手術がいやだとか、薬がいやだとか、あまり長い病氣に自分ながら早や倦みはて、子供のやうにもなつて来る、そんならばもう命が惜しくはないのかと醫者にいはれて、自づとまた黙りこむやるせない心を歌つたものである。



病室の窓にもたれて

久しぶりに巡査を見たりと

よろこべるかな

全ての世間といふものと隔離せられたこの病室の窓に倚つて、たゞぼんやりと戸外を眺めてゐるが、折しもそこへ通りかゝつた巡査のかけをちらりと見てあゝ巡査を見たくとさも珍しいものでも発見したやうに欣び立つ自分の心を眺めて歌つたものであらう。

ドア推してひと足出れば

病人の眼にはてもなき

長廊下かな

漸く立ち上つて歩み得るやうになつて來たので、喜び勇んで病室の扉を押してみた、すると、まアこの長廊下の何といふ長い事ぞと、とても今の身に歩みも兼ねる、意外にも雄大なる病院の長廊下を打ち眺めてまた新たな哀愁に囚はれる病人の心を詠んだものである。

### 「佇みて」の歌

今度は土岐哀果君の最近の著作「佇みて」の中からその特長とも見るべき歌を引いてみる。「佇みて」は昨年の五月、著者が朝鮮滿洲の方を旅行した時の作が輯められてあるのである。ありふれた旅の歌と違つた味ひを覚えしめられるのが誠に多い。

それとなく、ひとりとなれば、あのころのこゝろに

ならんと眼を

瞑るなる。

旅に出て、誰一人知る者もない全く獨りぼつちの身となれば、いつの間にもやら自分の心はあの頃の昔に立返らうと自づと眼をも瞑らうとする、といふのである。あのころのこゝろといふのは、あの當時の自分の心といふ意味で、即ち追憶の日である。あゝいふこともあつた、斯ういふこともあつた、噫あのなつかしい追憶の日に、といふのだ。朝夕の忙しい職業裡から離れて端なくも斯う唯だの獨りとなつた汽車中か宿屋での作を見ると一層なつかしさの増す歌である。



土岐君の歌も前の石川君の作と同じく、極く凡俗な日常使ひ慣らされた言葉を以て歌つてある。然しそれとて不用意に亂雑に用ひてあるのではない。さうした言葉に含まれてある意味を十分に生かして詠んである。詠んである題材も日常生活裡に於ける一些事とも見るべき、一寸人の氣のつかぬ事がらなどが、多く採られてゐるが、さうした間に却つて深い人間の味ひを覚えしめられるものがある。

たそがれの、

さびしき心の前に来て、

ボーイは寢臺をつくりにかゝる。

前の一首に續いて出来た作らしく思はれる。旅中の一日、そこはかたなく物などの思はれて、いつになく打ち沈んだ或る黄昏のこと、ぼんやりとした自分の前に来て、使丁はいまいそくと寢臺の用意にとりかゝつてゐるといふのである。さびしき心の前、の心といふのは自分といふのと同じである。夕暮の何處となく勞れた様な静かな心の底には起るともなくいろくの物思ひが起つて来る。さうした場合の自分の前に来てさうした自分に係りもなくボーイが云々といふのである。この場合、このボーイまで何となく愛らしい美少年で、もある様に聯想せられる。

舷橋をのぼらんとして、

てのひらに

しつとりと夜露をにぎりたるかな。

夜の港の歌である。港には大小幾多の汽船帆船が碇泊してゐたであらう。それらの船々には赤や青のさまざまの記號燈がかゝげられてあつたに違ひない。それらの船々の間を漕ぎ廻る小さな舟の櫓の音や、呼び交す舟子どもの濁聲や、またはひたくと眞黒にうねる夜の波の音が其處等中に起つてゐるに違ひない。それらの間に浮んでゐるある一つの大きな汽船、それはこれから自分の乗つて行くべき〇〇丸である、その汽船に乗り移らうとして通船から舷橋の欄干に手をかけた、スルと如何であらう、その舷橋の欄干にはしつとりと夜露がおりてゐた、といふのである。舷橋とは汽船の横腹についてゐる乗降用の階段である。その階段に手をかけた刹那の旅馴れぬ人の心がよく現れてゐる。

浴室のきふじの靴のびしょくくに

濡れて、五月の

夜となれりけり。

船中の作としてあるから、この浴室は汽船の中のそれであらう。さう思ふと一層情趣の深いのを覺



える。ゆつたりと湯槽に浸つて、何思ふともなく夢見るやうな心地になつてゐると、浴室づきの給仕が何かとあちこち立働いてゐる、見るともなくうち見やればその給仕の靴はびしょく濡れ終つてゐるのであつた、といふのである。五月の夜となれりけりは、その浴室にその給仕の靴の濡れてゐるのに氣づくと同時に、お、いつのまにやら夜に入つたといふ感じがしんみりと身に湧いたといふのであらう。イヤ、びしょく濡れに靴を濡らしてゐる給仕よ、といふ心持と、しつとりと暮れて行つた船中の五月の一夜との間に何とも云はれぬ調和を感じたと見る方がよいかも知れぬ。

や、や、——

朝鮮服が立つてをり、白くぼんやりと、

朝のみなとに。

斯うした調子はこの作者獨特の境地である。程なく上陸しやうといふので、夜のひきあけの甲板に見るともなく眺めて立つて居れば、次第に、港は近づいて来る、その港の岸に、や、や、居たぞ、居たぞ、朝鮮服が！といふのである。嚴密に三十一文字にはなつてゐるまでも、自然に出て來た聲の調子のなかに、却つて、それよりもよく調つた節まはしを感ずるであらう。

朝鮮の、五月のひるの

ボブラの青葉、

そよりともせず、鶏遊べり。

別にとりたて、いふ程のこともないが、朝鮮のと初めから云ひ出したあたりに、見知らぬ國に立ち入つた場合の、事ごとに驚きの眼を見張る心持なども窺はれる。

やうやう食欲のつき、

卓上の

あかき葵の花びらを嗅ぐ。

佳い歌だ。やうく、食欲のつき、は兩様に解せられる。旅づかれか何かで一向おなかも空かなかつたが、といふのと、時になつたので自然と食欲が出て、といふのである、私は前の意味にとつてこの一首を味ひ度い。漸くもの欲しい心地になり——すがすがしいおちついた心地になつて來た、と見ると、自分の前の卓の上に眞赤な葵の花が置いてあつた、それにすら何となく心が惹かれて、手近に引き寄せてしみくとその薫りを嗅いでみた、といふのであらう。卓上といふのも私は食卓と解し度い。そして初夏の草花の眞赤に咲いてゐる卓を前に、靜かに食事を待つてゐる旅の若者をありくと思ひ



浮べずにはゐられない。

耕牛の鈴のひびきを

路ばたに

よけし心の、しづかなるかも

耕しをする牛、その牛が鈴をつけて向ふからやつて来る、その牛の通り過ぎるのを、ぢいつと路傍によけて待つてゐる間の静かな心よ、といふのである。じやらん／＼と鈴を鳴らして歩いてゐる牛、それに添つてゐる朝鮮人、荒れた四邊の山や野や、さうした背景を考へ出すことに於て一層この一首の味は深い。

桃の花、

秋風嶺驛の柵のほとりに赤かりし

午後三時かな。

秋風嶺といふ停車場があつた、その停車場の柵のそばに桃の花が眞赤に咲いてゐた、折しもその時、時計は午後の三時をさしてゐた、とふつ／＼と思ひ出した様に詠んである。晩春の小さな停車場の柵

のほとりに咲いてゐる眞赤な桃の花と、午後の三時といふ時間との間に何とはなしに一種のさびしい調和が見出されてゐるではないか。

わが顔のまことに黄ろく

瘦せたるが

朝鮮に来て、さらにいとしも。

旅情のゆたかな作。知らぬ他國に来てから、この自分自身といふものが一層に愛まる、といふのである。自分の平常氣になつてゐるこの黄ろい瘦せた顔よ、しみ／＼今朝はお前がなつかしいといふやうな、朝の洗面後、鏡に向つた時の作で、もあるかと思はれる。

ぎやつ、ぎやつ、――

この鶉のこゑの、さびしさに、

五月の朝の、眠たかりけり。

静かな、うるんだ五月の朝、あやしい聲で空を啼いてゆく鳥がある、ア、あれは鶉だと思ひながら、聞くともなく遠ざかりゆく、そのき、馴れぬ鳥の聲に耳を傾けてゐると、うと／＼と何とはなし



に眠くなつて來るといふのである。心のゆるんだ旅館の五月の朝にいかにもふさはしい歌と思ふ。

唾を吐き、唾を吐きつゝ、

このみやこの

貧しき巷を通るなりけり。

貧しいこの都といふのは、京城のことであらう。何といふきたならしい街路だと、荒れはてた舊い都を且つ賤しみ、且つなつかしんで歩いてゐる様が見える。

よぼよぼと、そつと、

聲をかくれば、ふりむけり、

南大門のたそがれの顔。

南大門とはその荒れはてた舊い都に残つてゐる城廓の一門かと、記憶する。よぼとは今は亡んだその國の住民を賤しんで呼ぶ名稱であつたと思ふ。夕方、その南大門のほとりを通つてゐると、彼等見馴れぬ風俗をした住民が自分の前を歩いてゐる、何とはなしにフィと唇に出て、よぼよ、よぼよと聲をかける。と黄昏の薄闇のなかに、その人間がぼんやりと此方を振りむいた、といふのである。さりげなく云ひ捨て、ある言葉のなかに、いろ／＼と深い味がこもつてゐる。

### 『森林』の歌

本號には最近に出た前田夕暮君の歌集『森林』(大正五年九月十日發行)の中から佳作を抜いて評釋を試みる。同君と私とは作歌上の信念に於て可なり相違したものを持つてゐる様である。だから同書全體としての作には随分反對したい傾向が見えてゐるのであるが、此處には唯だ私の眼に佳作と映じたものゝみを抜いて來た。或は此等が全部著者會心の作でないとも限らぬと思ふから、先づ一言を認め置く。

氷小舎ひつそりとして黒き馬大戸の前に尾を

垂れにけり

榛名山に遊んだ時、榛名湖畔で出來た作らしい。

氷小舎といふから、中にびつたり氷が詰められて少しの空氣も通はぬやうに密閉せられてある、或る薄暗い建物を聯想する。その氷小舎の重い大きな扉の前に、いま眞黒な馬が居て、その長い尾を垂



れてゐるといふ歌である。

如何にも印象的な、はつきりした歌であると思ふ。一體にこの作者は以前から斯うした寫生式の歌に長じてゐた。あるがまゝの自然に觀て、それを直ちに一首の上に描き出す手腕は確かなものである。

氷小舎のなかに氷をひく音の鈍くひびきつ霧  
深し、晝

同じ時の歌。

氷小舎の中で氷をひく鋸の音がじよつ、きんじよつ、きんと、のろく、聞えて、戸外には霧が深々と降りてゐる、この眞晝よ、といふ一首。

霧深し、晝。と句を切つたのなども印象を深くする一手法となつてゐる。

わが前のましろなる樹を白樺と知りて直ちに  
手ふれけるかも

自分の前に何やら眞白な幹の樹が立つてゐる。氣がつけばそれは白樺であつた。

ア、白樺か、と直ぐにその幹に手を當てた、といふ一首である。

卒直に歌ひ下してある中に、白樺の樹に對して持つ作者の強い愛情が實に氣持よく出てゐる。

白樺のもとによりそひ打ちあふぐ秋近き空の  
色のかなしさよ

白樺の樹陰から、と云つたゞけでは云ひ足りない、自分の好きなこの白樺の幹により添うて、見上げた空には秋近い光がありありと漂つてゐた、その光の何とはなく身に浸みてかなしいことよといふ一種感傷的な歌である。

佳い歌とは思ふが、私は前の一首の卒直なのを採り度い。

白き牛肥えしが乳房ほのあかみひとつ離れて  
草はみるたり

多勢牛のゐる中に、眞白な、肥えた牛だけ唯だ一疋が群を離れて草を食つてゐた。見ればその牛の乳房は仔牛でも居ることか、ほの赤く染つてゐた、といふのである。

同じく印象深い作である。歌つてない、多勢の牛の群も眼に見えるやうだ。



わがめぐりつどひ來れる野馬の眼のつぶらに  
すむにや、恐れけり

牧場の歌。

廣い野原に——云つてはないが、さう思はれる——入つて行くと、諸所に離れくくに遊んでゐた馬が自分を見つけて多勢集つて來た。その多くの馬がみな、濁りのない、大きな眼を見張つて自分を見つめてゐるのを見ると、云ふやうなく可愛いなかに何となく一種の恐しさも混つて來るといふのである。

いかにも野の匂ひのする清新な作である。それにしてもや、恐れけりは少々幼稚ぢやアないか。

乳色の花むらがれる一もとの木をおそれけり

山ふかく來つ

山深くわけ入つて行くうちに、何といふ樹だか、乳色をした白い花がいつばいに咲き垂れてゐるのを見つけた。ぢいつとそれを見てゐると、何とはなくその花がたゞの花ではないやうに思はれて來て、そゝろに度々しい思ひが身に浸んで行くといふのである。

山の奥の、四邊みづくした樹木ばかりの中に一本、眞白な花をつけた何やら名の知れぬ樹と、そ

れを仰いでぢいつと立ちつくしてゐる男との影がありありと見えて來る。

わが着たる蘆に來て鳴る山風に秋をおぼえて

山越えありく

自分の着てゐる蘆には折々風が吹いて來て音を立てる。

その蘆を着ながら、段々と山深く進んでゐると、如何にも秋の立つのが親しく思ひ起されて來るといふのである。

秋だ、秋だ、といふ氣持の一首である。

うつ、なく物をおもひて歩みしに蝶々むらがり

り日にのぼりけり

ぼんやりと我を忘れて歩いてゐると、不圖自分の前かたから多勢の蝶々がむらくくと一團に群つて大空の方へまひ上つて行つた、といふ一首。

日にのぼりけりは太陽の方へまひ上つて行つたといふのであるが、ぼんやりしてゐる所へむらくくとまひ上る蝶々に驚いて、ふり仰ぐと其處には皎々たる太陽があつた、といふので、何となく一首の



上に神秘的な色彩を與へてゐる。

わら草履しろき踵をあらはにもみせて娘の小  
走りにつゝ、

ちよつとした寫生であるが、實に生きてゐる。その娘、といふよりその娘の踵そのものが、實に親しく思ひ浮べられる。

斯うしてみると、自分の心を、また眼をさへ常に、鮮かに持つてゐるならば、歌になる材料は實に其處等に無限に満ちてゐると思はねばならぬ。

わが兒いまだ父の怒れる眼を知らずされば笑  
ひていだきけるかも

この兒はまだ俺の怒つた顔を知らないのだ、と思ふと強ひても笑顔を作つて抱いてやらねばならなくなつた、といふ自分の子を愛する一首だと思ふ。

されば笑ひて、のあたりに何だか少し生々すぎる口調があるやうにも思ふが、その素朴の内にまた云ひ難い味があるとも思はれる。

ながき尾を地に垂れにつゝ、わがあとをつき來  
し犬よ歸りゆくかも

何處の犬だが、長い尻尾を地に垂れて（垂れにつゝ、が不快だが）長い間自分のあとについて歩いて來た犬が、ア、急にあと返つてゆくわい、といふ一首。よくあることだが、その時のさびしい、靜かな心持がよく出てゐる。心を澄ましておくこと、常に靜かに保つて居ることは、また作歌の上に忘れてならぬ必要事である。

船底に砂のするゝをきゝしときわれおり立ち  
ぬ夜の渚に

船の底が砂に觸るゝ音が急に耳に立つた。

と、同時に私は船から降り立つたのであつた、夜の暗い渚に、といふのである。何處までも質實な感觸といひ、手法といひ、心憎いばかりだ。

この數首を見ても解るやうにこの作者は何處までも眼の前の、或は心の奥の、現實に即いてのみ歌つてゐる。だから、それが、重々しい、徹底した作となつてゐるのだ。上江のしない、嘘や氣取りやごまかしやの無いのが、誠にありがたい。手法から云つても多くは寫生的で、普通われ等の何の氣な



しに見落してゐるやうな細かな所をよく捉へてゐる。

### 年少作家の歌

既に一家をなしてゐる人の作と、本誌投稿家の作とを代り／＼に評釋して行つて見よう。本誌には先づ本誌投稿歌の中から引用する。

あすはあすせめて一日の清かれと朝風呂にし

てしみ／＼水浴ぶ (省三)

明日は明日、といふのが厭味で却つて力を弱くしてゐるがとにかく佳い歌だ。清かれといふのも單に清いといふ意味でなく、はつきりと緊張した一日を送り得る様にといふ意味を含めてほしかつた。一日の生活に入らうとする謂は、門出の朝ぼらけに、祈禱の如くしみじみと水を浴びてゐる引きしまつた人の心が誠に尊く感ぜられる。

時雨めきしとど飛沫のふりかゝる甲板なり遠

く燈臺が廻る (美奈志鳥)

下の句の、よく舌の廻らぬやうな詠みぶりのなかに、わざとならぬ緊張した心が表れてゐると思ふ。村時雨のやうにばら／＼浪のしぶきが甲板の上に亂れて来る。揺れ揺るるその甲板の上に辛うじて身を立たせて四邊を見渡してゐると、ふと燈臺の光が眼に入った。遠い遠いその燈臺は、時に白く、時に赤く止む時なく廻轉して輝いてゐる。といふのであるが、風の烈しい海上に浮びながら遠方の小さい燈臺の光を雨と亂れた飛沫ごしに眺めてゐる心持が可なり充分に現はされてゐる。

アカシヤの若葉のかげの白壁の家をながめて

急ぐ祭日 (芹螢)

いかにもあどけない、うひ／＼しい水彩畫のやうな一首である。これを読むと我々の心には、どことも知らぬ廣い平野の初夏の景色が浮ぶともなく浮んで来る。何となくときめいた祭日のその平野には、そこ此處に派出な着物をつけた人々の姿も隠見し、笛や太鼓の響も聞えて来る。さうしたなかをいそ／＼と急いでゐるこの作者、アカシヤの若葉に囲まれた白壁の家など何だか小さな物語めいた聯想さへも浮ばうとするではないか。



初夏の朝のひかりの戀しさにけさも下しぬ青  
きまどかけ (一勢)

前の一首を水繪とするならば、これは油繪であらう。心憎いのは、そのカーテンを上げるといはずに下したといつてある事である。初夏の朝のいかにもみづ／＼しい光が戀しくて戀しくて耐らない、そしてあらはにそれを浴びることをなさずして靜かに窓の帷を下して、その帷越しにさし入る戀しい青い光に心おきなくうち浸つてゐるといふ、ほんとに心にくい歌である。省三君のこの作とはその感情の柔かに且つ濃やかな點に於てよく相似通つて居る。

懸命に吹く矢あたれば心ふとあはれまれてわ

れ手をひたうつも (三蛇齋)

今度の博覽會に南洋の土人を連れて來てある。その中食人種といふのに彼等の唯一の武器であるとかいふ吹矢を吹かせて觀覽人に見せてゐる。この歌はそのことを歌つたものである。斯んな所へ連れて來られて、毎日々々多くの人に面を洒させられながら懸命になつて矢を吹いてゐる、そのいぢらしい有様に心を惹かれて立止つて見てゐると、折しも吹き出したその矢がうまく的に當つた、それを見てわれ知らず手を拍ち囁いたといふのである。極く軽いスケッチ風のものではあるが、何となく棄て

難い。唯だ三句以下の云ひかたがいかにも説明的で、ぎこちないのがいやだ。

棧橋もひとも我等もゆら／＼に揺れてさびし

き別れなりけり (紫絃)

よく整つた作であるが、何となく力が乏しい。その別離のさびしさといふものが一向讀者の心に通じて來ぬ。恐らく作者自身その寂しさを痛感することなく、これは丁度歌にするにいい、といふ位の考へで詠んだものではあるまいか。

熔鑛の火かげにあまた人群れてあれども父は

あらずなりけり (道忠)

鑛山の熔鑛爐係か何かしてゐた父の永眠後に詠まれたものである。熔鑛爐とは鑛山から掘り出した鑛石を釜に入れてとろ／＼に焚き熔かす所である。それらの事は詳しくは私は知らないが、曾て某鑛山に行つたとき、その大きな釜みたやうなもの、一方の口からはとろ／＼に熔け終つた眞赤な鑛石の液體が恐しい勢で流れてゐた。それを四五人の男が別の器に受けて他へ運んでゐるのを見たことがある。物々しい機械と、室に満てる火氣と臭氣と音響等とに全く別天地のやうに凄愴な觀を呈してゐた。



その間に働いてゐる人もみなこの世の人ならぬげにも見受けられたのであつた。この歌を見て直ぐ私にはさうした光景が心に浮んだのである。さうした煉鑛爐に今日も同じく液體の火は流れ、機械はうめき動いてゐる。その前には變りもなげに數多の人が群れてゆゑ、しい仕事に従つてゐる。それなのにたゞ一人その群のなかから今はわが父を見出すことは出来なくなつたのだ、といふ意味である。一言も悲しいとか淋しいとか云つてはゐないが、斯うした一本調子の素朴な言葉のなかに、云ひ知れぬそれらの感情が充分に含まれてゐるではないか。特に場所は場所なり、一層深くこの感を惹き易い。

幸福はいつ来るものぞほと／＼に針の運びも

もの憂くなりぬ (その枝)

斯うして毎日々變りもなく針を動かして物をば縫つてゐるが、一體いつになつたら幸福といふものは私の身にめぐつて来るだらうといふ禁めかねた一種絶望的哀愁が寧ろなげやりなこの調子の底に深く沈んでゐる。一寸見たところではいかにも平凡な作のやうだが、斯んな歌は永く見れば見るだけ、味の深くなるものである。眞實の心から出た聲だからであらう。

しとしとと降る雪の夜の空室くうしつに長き尾垂れし

猫は歩めり (峰次郎)

印象の深い一首である。しとしと／＼戸外には雪が降つてゐる、もう餘程深く積つたことであらう、その夜のとある一室、其處には人もるなければ殆んど何一つ置いてもないに、一疋の猫がのそり／＼と歩いてゐる、何といふ尾の長い猫であらうぞ、といふほどの作である。初めもなければ終りも無いやうな、物の兩端を切り離してつき出したやうな斯の詠みぶりに、一種の光が宿つてゐる。

笛吹けばあはれ悲しきわれをしもとらへて月

は高くありけり (長次郎)

悲しさに耐へかねていとしみ／＼と笛を吹く、笛の音はいよ／＼澄みゆきわが悲しみもいよ／＼澄んで来る、ふと見れば天心深く一個の月が懸つて皎々と輝いてゐる、さながら悲しみの身の氷れよといふごとくわれに臨んで輝いて居る。

不平なく夜業を終へて叔父と共に風呂屋に行

けば十時が鳴れり (花魂)

先づ／＼今日も楽しく可笑しく夜業の仕事をかたづけた、どれ叔父さん一風呂浴びて來やうぢやあ



りませんかと手拭さげて一緒に湯屋にとび込めば、オヤ／＼丁度十時の時計が鳴り出したといふ一首。いかにもすら／＼と苦もなく詠んである口調のなかに、不平なくといふ氣持も、十時が鳴れり(サテ、暖つた所で寝やうかな、といふ何となくゆつたりと安堵した)といふ氣持もよく了解出来る。まことに自然な歌である。

春來れば苗床づくり茄子きうり蒔きつつほか  
に事なかりけり (はな子)

いつのまにやら春が來た、いつものやうに苗床を作つて、茄子の種胡瓜の種と蒔いてしまへば、もう他には用もないといふ田舎住ひののんきな淋しい春の日を歌つた一首。これも自然に唇から漏れて出たやうな調子のなかに、深い心が表れてゐる。

學校を嫌ふ弟に意見する父の眼のかなしき四  
月 (おなじく)

右と同じ調子の一首である。學校を嫌ふといふ弟を前にした優しい父に對する同情が動くともなく動いてゐるのが目に見えるやうだ。そののみならず、その父と子とを包んでゐる四月あたりの一種のやるせない氣分も佳き背景としてそのうしろに匂つてゐる。

斯うした寫生風の詠みぶりが近來甚だ多くなつた。よい傾向ではあるが、心しないと極く雜漠な味のないものとなり易い。客觀風の描寫といひ寫生といつても、要するに作者自身の問題である。こちらがしつかりしてゐなくては、眼前ありとあらゆるものを寫生したところで何にもならぬ。

廢園をさまよひてあれば沈丁花わが生に似て  
かなしかりけり (虹汀)

甚だ云ひ足りないが、底力のある歌である。雜木雜草の生ひ茂つた廢園のなかに、ふと一本の沈丁花を見出でた、何といふ烈しい惱ましいその匂ひぞ、とその雜草中の沈丁花が何とやらこのごろの自分に似た様にも思はる、といふ意味であらう。云ひ足りないが悪い作ではない。

しらじらと月は岬にかがやけど海はも暗し燈  
臺ひかる (逸名)

271  
海には、その夜、風があつた。晴れ渡つた大空のもとに次ぎから次ぎへと大小さまざまの浪が群り起つてゐた。月はいま漸く水平線を離れたばかり、遙か一すぢの岬にはしら／＼と白い光が流れてゐる



るが、一帯の海面はまだ暗い。泡だつたその暗い大海の片隅に一つの燈臺が光つてゐるといふ歌である。眼前ありのまゝの光景を左程の感嘆も無しに歌つてあるなかに却つて云ひ難い趣きがある。噛みしめてのち味の出るといつた側の作である。

いちめん海はあかるし波の上白く光りて海

鳥のとぶ (同)

雨あがりの海のしづけさしらぐと飛魚のむ

れが夕陽に光る (同)

いづれも似た様な海の歌だが、こちらの方は唯だこれだけの、云はれたゞけのことが何か器物にでも入れられてある様に、動くことなしに表れてゐるのが物足らぬ。何處か渴いて枯れてゐる。

ひるやすみわれ寢て居れば起されて秋蠶棚を

掃除しにけり (同)

あつさりとした、秀れた俳句などによく見受くる型の歌である。折角の晝の休みにうと／＼と一ねむりやつてゐたものを、また起されて今度は秋蠶棚の掃除をさせられたといふのである。その時のあ

りさまが眼に見える様である。その時の作者の心があり／＼と一首の上に踊つてゐるのを悦ばしく思ふ。

くもり日は石のごとくも見え渡る鑛山町の空

とぶ鴉 (同)

石の浮彫でも見る様な歌だ。曇つた日にはまるで石のやうにも見ゆるこの鑛山町の空を、アレいま鴉がとんでゐるといふのだが、死んだ様にも冷たい鑛山町、町の上のくもり空、その中をたつた一つとんでゐる黒い鳥の姿は誠に何かの暗示の様にも見ゆる。捉へてある景色、云つてある言葉に何の無駄がなく、しいんとした緊張した歌になつてゐる。

なにといふさびしさをもておほどかに富士の

裾野の暮れてゆくかも (同)

身も世もあらぬと云つた様な調子の歌である。私はその調子をとる。静かに／＼暮れてゆく富士の裾野を眺めてゐるが、次第にわれ知らず昂ぶり来る心の動きをとゞめかねて何といふさびしさを、もて云々と詠み出でたあたりに作者の心の熱が通つてゐる。ゆくかもは多少不消化だ。ゆくらむの方が



よいかも知れぬ。

しみくゝと汽車のひびきがこの心撫でゆくごとく覺ゆるひと夜 (同)

しみくゝした静かな小夜なかに、遠く走る汽車の響が聞えて来た、ぢいつと聞き入つてゐるといつの間にか自分の心も柔らかいでゆく様な……といふのであらうが、何となくその心持が直接に讀者に傳はらないのはこの歌が説明風に出来てゐるせうであらう。

谷底のま深く暗きその色に心しみくゝ親しまれけり (同)

この歌もまたさうである。云つてあることがらだけはよく解るが、その場の作者の心持といふものは出てゐない。その時の心そのものではなくて、その心に似せた他の或物が表れてゐる觀がある。

桐の樹の根もとにゆきて悲しみあればわしわし  
し蟬のなきいでにけり (同)

悲しみあればの一句が一首の影を薄くしてゐる。うはの空に聞えて一向身に沁まない。この一句のみならず、一首全體から見ても何となくぼんやりしてゐる。恐らく作者のその時の心もぼんやりしてゐるに相違なからう。

淋しさにわがよる椅子は朝あけのみどりの山  
に向ひてゐたり (同)

寢椅子よりうち仰ぎみる眞晝日の青ひと色の  
空のさみしさ (同)

同じく椅子の歌で双方ともい、歌である。どちらかと云へば私は前者をとる。後者にはや、説明が勝つてゐる。

園丁のみだらなる姿わがことの如く悲しき眞  
晝なるかな (兼也)

ほの白く朝づき來ればまひ出でてかなしき空  
をゆくよ蜜蜂 (同じく)



二首とも、悲しみの珠のごとくに澄み入つてゐる。日は麗らかに照り籠り、丈高く伸び出でた青草の葉を揺る風も無い、空は飽くまで蒼く地は飽くまでに静かである。この眞寂界に引き入れられて了つた作者の眼の前に一人の園丁が動いてゐる、園には雪のごとくに白い花、針で刺すやうな紅の花の群がうつとりと夢見るやうに咲いてゐる。それらの花の間に動いてゐる園丁の、これはまた何といふしどけない姿であらう、隠すべき所もあらはに、髪は延び眼は濁り、老いたる熊の病んだやうな手を出して何やら蟲を取つて居る。それを見ると共に急に心臓に銀の針でも當てられたやうな、云ひ難い冷たさを覺えてそゞろにぞつと身を慄はすといふ一首。よく眞畫の花園の静けさを歌つてあると思ふ。後の蜜蜂の一首も、格調其他、寧ろ前のに優つてゐるかの觀がある。

いなごひとつ稲の葉先に飛びつきつ向ふの山  
に煙立つ見ゆ (正一)

なにごとか思ひうかべて梨むきつ見つめてる

たり牛蒡畑を (同じく)

専念に俵あみるる弟の横顔見れば悲しとぞ思  
ふ (同じく)

これも同じく静かな所ではあるが、溝口君より客觀的に動的に詠んである。一すぢに澄み入つた心の、神経の前には僅か蝗一つの飛ぶ影すら見逃がせない、その蝗に驚いて眼を擧ぐると向ふの遠山にはしらぐと一すぢ煙が上つてゐた。窓の下から直ぐ引き續いた牛蒡畑、其處には強い静かな光線が降り注いで重り合つた葉はお互ひに深い影を投げてゐる、見るとなくそれに見入りながら、心もそらに梨をむきつ、ありともしもない物思ひに耽つてゐる。その姿が、その背景が、眼に見えるやうではないか。一心に編み入つた弟の、一糸動かぬ顔色にフト眼がついた、と同時に憐れとも尊いともつかぬ感情がしいんと身を浸して起つて來たといふ一首、これもなか／＼佳い作である。眼の前の微細な景情を寫し描いて、そしてそれに其場の自身の心を傳へるこの人の手際は巧みなものである。然し、斯の種の手段はともすれば手段のための手段に陥ることが多い。例へば強ひて種々な景物を、蝗とか牛蒡とかを、持つて來て配合させ、うまく一首をでつち上げる。それでは既う出來ぬ前から歌は死んでゐる。飽くまでも實情實感でなくてはならぬ。

明方のもの静かなる悲みになつかしいかな蝸  
の鳴く (嵐鳥)

無花果の實も葉も青き七月の白々ほそき晝の



雨かな (同じく)

佳い歌だが、少し弱い、薄い。實感が乏しく強ひてさうした静かな境地を作つた様な風がほの見える。

椿の果青褐色に光りゐてこの曇り日のいかに

わびしき (朱鳥)

かろやかにひともし蜻蛉とべるがにわれは酒

場に杯を取らむぞ (同じく)

歌つてある場合々の作者の心持をばよく推量することが出来るが、惜しいかなそれを歌ふに用ひた言葉が消化れてゐない。さうした柔かな心持を傳ふべく此等の言葉は餘りにがさく／＼ぎし／＼してゐる。歌の言葉は直ちに歌はむとする心持そのものであらねばならぬ。その心すなはちの洗練された象徴であらねばならぬ。

屋根の雪いまだ消えなく紅椿うつらうつらに

日の中に咲けり (夢之助)

春あさき小田の泥鰯を双手にてすくへばあは

れ冷たかりけり (同じく)

いづれも濁りのない、そして自由な詠みぶりである。作者の心の柔かさ穩かさが窺はれて快い。

足袋のちり拂ふ夕の雲の色まことはる／＼と

晴れにけるかも (桐之助)

其時の作者の、ほつとした、はれ／＼とした心持があらひのまゝに出てる。

ほの／＼と月のぼる見ゆわが心さびしくもあ

るか母と向ひて (渡邊順三)

何處か句調に落ち着かぬところはあつたが、佳い。一、二句は特に佳いと思ふ。ほの／＼とした月の光に浮き出でた母子の影、其處にも人間の哀しみは漂つてゐる。

明るみに流れしいのちほの／＼と晝の酒場を

出づるなりけり (雨絃)



この人の他の數首はわざとらしいのやぎこちなひが多かつたが、この一首だけは先づ自然で、そしてこなれてゐた。

## 『與謝野晶子集』の歌

『與謝野晶子集』は大正四年三月の出版、それまでの同女史の作から一千二百首ほどを自選せられたものである。

當時の歌壇を震撼させた「みだれ髪」の、

道をいはず後を思はず名を問はずこゝに戀ひ  
戀ふ君とわれとは

罪おほき男こらせと肌きよく黒髪ながくつく  
られしわれ

夜の帳にささめきあまき星もあらむ下界の人  
ぞ髪のはつるる  
あゝこの子櫛にながるゝ黒髪のおごりの春の

うつくしきかな

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みな

うつくしき

やは肌のあつき血汐にふれもみでさびしから  
ずや道を説く君

御相いとゞしたしみやすきなつかしき若葉木

立の中の盧遮那佛

ゆるされし朝よそほひのしばらくを君にうた

へな山の鶯

なにとなく君に待たるゝこちして出でし花

野の夕月夜かな

ほの見えし奈良のはづれの若葉宿うすまゆず

みのなつかしかりし

などの自由奔放を極めた、而かも稚趣満々たる作から十數年を経た後の新作に及んでゐるのである。叙景抒情、ともに女史の作は多く才から出でゐた。ことに叙景にそれが多かつた。殆んど配合のみ



から成つたやうな歌のみ目についてゐた。巧みだとも、美しいとも思ふが、而かも何處やら親しみ難い不自然さがついて廻つてゐた。抒情の歌にすら、どうかするとさうした芝居が、りのものが混つてゐるが、新作になる丈けそれが失せて來てゐる様だ。茲には特にその中でも新しい、女史が良人渡歐後、その留守居の淋しさ悲しさ、または抑へがたい哀慕の心を詠んだものから引いて來る。連作風になつた此等には、女史の作としては誠に稀に見る素直な心が動き出てるからである。

わが起居涙がちにてあることも旅なる人のみ

な知れること

何につけ彼につけ、朝夕の起居すら涙ながらにして居ることを、旅なる人はよく知つてゐて呉れるのだ、と涙に暮れた自分自身を淋しく振りかへりながら遠く離れてゐる人の心に據り頼つてゐる心持を歌つたものである。

何處にか、反語のやうな、多分知つてゐて呉れることであらう、それとも何とも思はないでゐるであらうか、いやいやみな知つてゐて呉れるのだ、と自分の心を抑へ／＼して自ら慰めて諦めてゐる様がほの見ゆるのをい、と思ふ。それに少しのこだはりなく、すら／＼と歌ひ下してゐるのは、いつもながらこの作者の腕の冴えである。

おのれこそ旅ご、ちすれ一人居る晝のはかな  
さ夜のあぢきなさ

旅に出てるその人より斯うして一人残つて居る自分の方が却つて旅の心地がする、夜につけ晝につけて、といふのである。

晝のはかな、夜のあぢきなさを重ねたあたり、少々輕過ぎるかとも思はる、が、自由なものである。

あぢきなく弱きかたへと日にす、む心と知れ  
どとらへかねつも

日にましあぢきなく心弱くなつてゆくことよと氣付いてゐるが、さて如何ともこの心の取り返しやうはありはせぬ、と投げ出したやうな、絶望に似た心持が一首の裏に働いてゐる。簡単な座談平語風の中にも何處にか人に迫る眞摯さがある。生きたこゝろさへ罩つてゐたら、何も大騒ぎをせずとも佳い歌は生れて來るのである。

たゞ一目君見んことをいのちにて日の行くこ



とを急ぐなりけり

たゞ一目、逢ひたいばかりに少しも速く目の前の時の過ぎゆけよと祈らるゝことではある、といふのである。速く／＼日が経つて、相逢ふ時の來ればよい、といふのである。

いまの所謂新派和歌の中にも随分戀の歌は多いが、斯うした淡雅な、而も心深い自然のものは少いと思ふ。そして、なみならず之れをなつかしいと思ふのである。

君こひし寢てもさめてもくろ髪を梳きても筆

の柄えをながめても

寢てもさめても——眼に映るすべてのものが戀しさの種とならぬものはない、といふのである。平凡だが、自然である。うつかりと唇くちを漏れ出した溜息に似たこの歌に理窟や形式を離れた強さがある。

わが男ひとへにたのむ哀れさのこの頃となり

あからさまなる

身も世もなく據りか、つてゐる自分の哀れな姿が、此頃では斯うもあからさまになつたのか、と云ふのである。わが男は即ち自分の據り頼んでゐる人のことである。もとより昔から一も二もその人に

據つてゐた、でも斯うまで露骨に、耻も外聞も忘れて據りか、つてゐるやうとは思はなかつた、といふのである。

自ら驚き、はかなんだ様も見えて、まことに哀れ深い一首と思ふ。

その妻をいひがひなしと憎みつゝ、罵りつゝも

歸り來よかし

何といふ云ひ甲斐ない、意氣地のない妻であらうと憎み罵りながらも、兎に角早く歸つて來て呉ればよい、といふその妻の歌である。

十歳とその子と一人の母とたぐひなく頼みかはす

も君あらぬため

十歳かそこらのこの幼い者とその母とが世にないものにかたみに深く頼み交してゐるのも、矢張りあなたがいらつしやらぬばつかりだ、といふのである。

うらめしと思ふこゝろもうちかへし寢ねにぞ泣



かる、逢ふすべなさに  
恨めしいと思ひ昂あがることもあるが、直ぐまた埒もなく泣きくづれるのみである。いかばかり恨んだ  
ところで、逢へるすべはないではないか、といふのである。

あな戀しうち捨てられし恨みなどもの、數に  
もあらぬものから  
前の一首と同じ。けれども、前のより何だか氣の抜けてゐるのを思ふ。

はれやかに人目ばかりをもてなしてある人に  
さへならふすべなし

いつも晴れやかに人まへを飾つてゐる人を日頃はうとましくも思つてゐたが、今ではもうさうした  
人たちの眞似すら出来なくなつたといふのである。あゝ、いふ風にしてゐたならば、と思つても、それ  
が出来ぬと自らをうとみもし、あはれみもした一首である。

以下註釋をよして單に歌のみを引いておく。歌はいづれも前の如く平明簡易、而して擲して盡きな  
い力を持つてゐるのも亦た前と同じである。敢て註釋の要を見ないと思ふ。

待つべしとなだらかに云ひ君やりし人ともあ  
らず狂ほしきかな  
よそものに君をなすとは思はねどたゞ見がた  
きがあさましくして  
男をば目はなつまじきものとする卑しきこと  
は思ほえなくに  
また君と見てかたらはん時のいと長きおそれ  
に病するかな  
わかれ住むかゝる苦しきならはでもあらまし  
ものをうつそみの世に  
身も人もいのちの耐へずなりたらばあはれな  
らまし遠く別れて  
筆とればまたわがこゝろやるせなく騒ぎそめ  
たり文かゝでねむ



## 私の歌の出来た時

## 春の歌

## 梅の花

私は、左様、この二十四五歳になるまでこの花が嫌ひであつた。いやに白茶けたやうな、而かもいつまで経つても散らうとしないその花も、いやにゴツ／＼した幹も、みな氣に入らなかつた。ことに雪霜をしのいで咲くといふ様なことで昔から讃め上げられてあるのに對してすら何やら反感を持つてゐた。

ところが廿五歳の春、その前一二年来續いてゐた戀愛關係のやうな出来事の煩に耐へかねて、獨りこつそり東京を脱け出して安房の太平洋岸の或る小さな漁村に遊んでゐることがあつた。暖かな土地で、まだ一月にもならぬといふにもう其處此處の岩の蔭や松林のなかなどにちらほらとこの花の白い

のが咲きそめてゐた。どうしたことであつたかその當時の何といふことなく疲れたやうな、何事にまれ一心不亂になることの出来ぬやうな氣持になつてゐた身には、妙にその花がなつかしく感ぜられた。ちやうど私の机を置いて居る窓の前にもこの花が咲いて居た。それを見い／＼繪葉書に認めて或る友人の許へ送つたのが次の一首であつた。これが恐らく私の作中に梅の表れた最初であつたらう。拙い歌だが、そんな縁故で私は梅の咲くごとにこの一首を思ひ出す。

好かざりし梅の白きを好きそめぬわが二十五  
の春のさびしさ

それを皮切りにして、それから毎年私はこの花の咲きそむるのを見るごとに妙に心をときめかすやうになつた。別に愛らしい花だとも、美しい花だとも思ふのではないが、これが咲けば、オ、またいつの間にか春になつた、といふやうな哀愁を覺えて、今まで暫く忘れてゐた物思ひとでもいふ風のものに沈むのが癖となつた。自分の心にも過ぎ去つた遠い春が——云へば氣障だが——歸つて來るやうな哀愁に誘はれるのである。次に尙ほ同じ花の歌數首を引いて見やう。

三十歳の春。

年ごとにする驚きよさびしさよ梅の初花をけ



ふ見出でたり  
梅咲けばわが昨きのの日もけふの日もなべてさび  
しく見えわたるかな

三十三歳の春。

梅のはな枝にしらじら見えそむるつめたき春  
となりにけるかな  
梅の木の蓄みそめたる庭の隅出でて立てれば  
さびしさ覺ゆ

これは梅の歌ではないが、同じやうな趣きを歌つた一首。春は私にはともすれば追懐の心のみを誘ふやうである。

春來ぬところそぞろにときめくを哀かなしみて  
野に出でて來しかな

櫻の花

嫌ひではないのに、私にはこの花の歌は少い。ずつと以前、十八九歳の漸く歌を作り始めたころには却つて多かつたやうである。然し、それも多くは題詠風の幼いもので、

母戀しかかるゆふべのふるさとの櫻咲くらむ

山の姿よ

春はきぬ老いにし父の御ひとみに白ううつら

む山ざくら花

父母ちちははよ神にも似たるこしかたに思ひ出ありや

山ざくら花

行きつくせば浪あをやかにうねりるぬ山ざく

らなど咲きそめし町

朝地震あさなみす空はかすかに嵐して一山さん白き山ざく

ら花

などの類である。その次ぎに作つたのは明治四十五年春、信濃の山の中をぶら／＼と廻つた末、急



に東京が戀しくなつて上諏訪から富士見邊の長い高原を汽車で通つて來ると、その高原を降りつくした甲斐の盆地にこの花が其處此處とほの白く咲いてゐたのを見て大いに驚きながら詠んだ二三首である。前夜泊つた上諏訪には未だ雪が深々と積つてゐたのであつた。

をちこちに山櫻咲けりわが旅の終らむとする

甲斐の山邊に

見わたせば四方の山邊の雲深み甲斐は曇れり

山ざくら咲く

雪残る諏訪山越えて甲斐の國のさびしき旅に

見し櫻かな

それから東京に歸つてゐると、間もなく四月の十三日に石川啄木君が死んだ。その臨終の枕邊から縁ひとつ距てた庭には八重櫻が今を盛りと咲き盛つてゐた。

初夏の曇りの底に櫻咲き居り衰へはてて君死  
ににけり

病みそめて今年も春はさくら咲き眺めつつ君

の死にゆきにけり

君が娘は庭のかたへの八重櫻散りしをひろひ

うつつともなし

#### 伐木の歌

私の郷里では陰曆の正月四日にどの家でも必ず木を伐る風習が行はれてゐる。いづれもみな薪にするための木であるが、鉦初めとか何とか云つて一種の縁起となつてゐる。大正二年父の病氣のため暫く郷里に歸つてゐた時、この日に會つた。父は既に亡くなつたあとなので、私が家長として家人や雇人などと一緒にとある雑木林に入つて木を伐つた。其處は高い大きな山と山との間に挟まれた高原で林は随分深かつた。家を出で、十年あまりの間手にしなかつた鉦といふものをとつてその水々しい林の中に佇んだ時は、誠に何ともいへぬ心地になつたのであつた。

われも木を伐る廣き麓の雑木原春日つめたや

われも木を伐る

春の木立に小斧振ることのかなしさよ前後不

覺に伐りくづしけり



春の木は水氣ゆたかに鉋切れのよしといふな  
 り春の木を伐る  
 梅の木の茂れる蔭に小半時あまり小斧振り伐  
 り倒しける  
 山柴の樫の冬青木のいろいろあるなかに椿ま  
 じれる悲しかりけり  
 椿の木は葉の茂ければほつたりと冷たき音し  
 てつちに倒るる  
 わが伐りし木々のみだれて倒れたる青き姿を  
 見てあるしばし  
 ややありて指にはまめの出来てきぬもはや止  
 めむと木かげに坐る  
 青木伐りつかれて村のむすめたち夜床のくし  
 き話をぞする  
 さびしさに娘のむれに入りゆけば一人のむす

めわれに云ふことに

春の歌

話があとさきになつた。前に引いた梅の白きをすきそめぬの歌の出来た同じ海岸にそれより一二年  
 前、私は一人の女を連れて、ひとに隠れて行つてゐたことがあつた。その時出来た歌を次にあげてみ  
 る。春といふ言葉も何もない歌が多いが、兎に角その時は春の初めであつた。そして、よし、その作  
 つた時が春でなかつたにせよ、私には此等の歌を讀み返す時には必ず「春」といふ感じが伴ふのが常  
 である。

戀ふる子等かなしき旅に出づる日の船をかこ  
 みて海鳥のなく  
 ああくちづけ海そのままに日は行かず鳥まひ  
 ながら死せはてよ今  
 接吻くるわれらが前にあをあをと海ながれた  
 り神よいづくに  
 山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照る



いざ唇を君

いつとなくわが肩の上にひとの手のかけられる  
 があり春の海見ゆ  
 砂濱の丘を下りて松間ゆくひとのうしろを見  
 て涙しぬ

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ  
 海にとられむ

君かりにかのわだつみに思はれて云ひよられ  
 なばいかにしたまふ

涙もつひとみつぶらに見はりつつ君かなしき  
 をなほ語るかな

君さらに笑みてもものいふ御頬の上に流るる涙  
 そのままにして

立ちもせばやがて地にひく黒髪を白もとゆひ  
 に結びあげもせで

このごろのさびしき人に強ひむとて葡萄の酒  
 を求め來にけり

いかなれば戀のはじめに斯くばかりさびしき  
 ことを思ひたまふぞ

もの多く云はずあちゆきこちらゆき二人は悲  
 し貝をひろへる

渚ちかく白鳥群れて啼ける日の君がかほより  
 さびしきはなし

わがうたふかなしき歌や聞えけむゆふべ渚に  
 君も出で來ぬ

くちづけの終りしあとのよこ顔にうちむかふ  
 晝のさびしかりけり

海人のむれ鴉のごときなかにゐて貝を買ふな  
 りわが戀人は



大正五年春、三月の初めに東京を出て松島から盛岡青森津輕と雪のなかを彷徨うて秋田方面から福島市に出て来たのは四月の二十日過ぎであつた。青森津輕の方には梅すら咲いてるなかつた。秋田には漸くそれが咲いていま七日もしたら櫻が咲かうといふ所であつた。そして福島に着いてみると、既に満開、市街も、郊外の信夫山も辨天山も到る所櫻と桃との眞盛りであつた。福島友人と一緒に其處から二里ほど離れた瀬上に他の一友人を訪ねて一泊し、翌朝三人して飯坂温泉に向つた。飯坂は瀬上より二里か三里、その間がずつと開けた平野で、平野を圍んだ四方の連山にはまだ白々と雪が輝いてるが、平野一面既にくく春は更け渡つてゐる。麥の畑、菜の花畑、その上を彩るものは桃の花である。よほど桃果の出来るところと見え、どの畑にもその周圍には桃が植ゑてある。桃畑そのものもある。その花が丁度いま満開のところであつた。麗らかに照り入つた日光は、幾日幾夜か打ち續いた酒の後の疲れ果てた旅の身に、而かも今まで右も左も雪の中に埋れてゐて出て来た旅の身に、溶けよとばかりにさしてゐる。二人の友とても同じく宿醉の、多くは沈黙がちな疲れた身體である。平野のはてに低い山が見え、その山の麓だといふ飯坂温泉はなかく眼界に表れて來ない。行くく歌ひ歌うた歌。

花ぐもり晝は閑けたれ道芝に露の残りて飯坂  
とほし

たわたわに落る春田のあまり水道邊に續き飯  
坂とほし

行き行けば菜の花ばたけ蝶々の數もまさりて  
飯坂とほし

友ふたりたけぞたかけれだんまりの杖をうち  
ふり飯坂とほし

菜の花のすゑの低山やますそれにそれとは見ゆ  
れ飯坂とほし

## 夏の歌



春の歌の部で、梅が好きになつたといつた心の裏にはいろ／＼な理由もあるであらうが、一つは梅の咲くことによつて春の來たのが解るといふ心持が餘程深いだらうと思はれる。春に限らず、一つの季節から次へ移るその間際の微妙な變移に常に私は心を惹かれるのが癖である。春だ／＼と思つて、まだ其處此處の畑の隅や堤の上に八重櫻などが咲き盛つてゐるうちに、ふつと眼を移して杳かの地平線の方を見ると、もう其處にはまるきり春に見られぬ色や形や匂ひを罩めた雲の姿が動きそめてゐる。お、夏が來た、と思ふ其時のころもち、それを私は限りなく愛するものである。昨今ではそんなでもないが、以前は私は随分この初夏を歌つたものである。春の騒々しさが過ぎて青葉若葉の頃となると、今迄と打つて變つた静けさが天地を包んで來る。しかもその静けさは夏より秋に入る時の静けさではなくて、何處までもみづ／＼しい、そして底に抑へ難い力を含んでゐる静けさである。歩いてゐる脚下の地にも、眼にうつる天にも草木にも、身體に觸る、空氣にも云ひ難い微妙な力が動いてゐる。それが好きであつたものと思はれる。

次に其の歌を少し並べて見る。詠んだ場合を説くのをば省略する。それぞれ歌によつて各自に解釋して貰ふのがいゝやうである。幼稚なるを答め給ふな、もうその幼稚な歌を作つて喜んでゐるた可懐しい時代は私にはなくなつたのだ。

はつ夏の雲あをそらのをちかたに湧き出る晝

夢の笛吹く

ものごしに静けさいたく見えまさるひとと住

みつつ初夏に入る

木々の間に白雲見ゆる梅雨晴の照る日の庭に

妻は花植う

くちつけをいなめるひとはやや遠く離れて窓

に初夏の雲見る

四月すゑ風みだれ吹くこよひなりみだれてひ

とのこひしき夜なり

あめつちのみどり濃き日となりぬ我等きそう

てかなしみにゆく

疲れはてて窓を開けばおぼろ夜の嵐のなかに

啼く蛙あり

しめやかに嵐みだるるはつ夏の夜のあはれを

寝ざめ眺むる



空のあなた深きみどりのそこひよりさびしき  
 時に通ふひびきあり  
 蛙鳴く耳をたつればみんなみにいなまた西に  
 雲白き晝  
 あをあをと若葉萌え出る森なかに一もと松の  
 花咲きにけり  
 窓ちかき水田のなかの榛の木の日にけに青み  
 嵐するなり  
 いとかすけく濃青のひるの高ぞらに鶯啼く聞  
 ゆ死にゆくか地  
 あなさびし白晝を酒に酔ひしれて皐月大野の  
 麥畑をゆく  
 畑なかにふと見いでたる瘦馬の草食みるたり  
 水無月眞晝  
 棕櫚の木の黄色の花のかげに立ち初夏の野を

とほく眺むる

水無月の洪水おほみづなせる日光のなかにうたへりうたへり  
 刈少女かりをとめ

遠くゆきまた歸り來て初夏の木にきこゆなり  
 眞晝日の風  
 一すぢの糸の白雪富士の根に残るがかなし水  
 無月のそら  
 松咲きぬ楓も咲きぬはつ夏のさびしき花の咲  
 きそめにけり  
 日を浴びて野ずゑにとほく低く見ゆ涙をさそ  
 ふ水無月の山

以上は『別離』の中の歌である。

風光り櫻みだれて顔に散るこころ汗ばみ夏を  
 おもへる



いちはやく四月の街に青く匂ふ夏帽子をぼう  
 ちかづきけり  
 ふらふらと野にまよひ來ればいつの間に淋し  
 や麥の色づきにけむ  
 雲まよふ山の麓のしづけさをしたひて旅に出  
 でぬ水無月  
 停車場の汽車の窓なる眼にさびし山邊の畑に  
 麥刈れる子等  
 木の葉みな風にそよぎて裏がへる青山にひと  
 の行けるさびしさ  
 かたはらの地を見詰めて松の根にわれの五月  
 をさびしがるかな  
 わが肌の匂ふも肌の上を這ふ蟻の歩みもさび  
 しき五月

以上はその次に出版した『路上』の歌である。この二歌集の歌を比較してみても其の間に幾らかの

變遷のあるのはよく解るであらう。その後も初夏の歌がないではないが次第に少なくなつてゐる。

ほととぎす

夏、と云つても同じく初夏の頃が多いが、その頃に啼く鳥をばいづれもみな私は好きである。梟もよくこの頃の夜に啼く。頬白鳥も啼く。みな、静かな、聽いて居れば自づと眼の瞑ぢられてゆく種類のものであるが、その中でもほととぎすが矢張り耳だつて聞える様である。ほととぎすといふといかにも古めかしい月並もの、やうに思はれるが、昔珍重せられてゐたとまた異つた意味に於て私はこの鳥を愛してゐる。山奥か、高原か、そんな所でこの鳥を獨りでぢいつときいてゐると、何だか全く現代離れのした、杳かな思ひが胸に宿つて來る。四邊の風物も何となく原始時代の面影を帯びて來るやうにも思はれるのである。そして、自分獨りがその中に生きてゐるやうな静寂をすら覺えしめられる。その思ひにくらべて、歌は多くは説明的な拙いものだが、とにかく引いてみる。

糸のごとく空を流るる杜鵑あり聲に向ひて涙  
 とどまらず

うつろなる命をいただき眞晝野にわが身うごめ

き杜鵑聽く



ほととぎす聴きつつ立てば一滴の露よりさび  
 しわが生くが見ゆ  
 瞰下せば霧にしづめるふもと野の國のいづく  
 ぞほととぎす啼く  
 眞晝野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵑の  
 聲きこえ來る  
 暈帯びて日は空にあり山々に風青暗しほとと  
 ぎす啼く  
 朝雲ぞ煙には似るこの朝けあわただしくも啼  
 くほととぎす  
 ほととぎすしきりに啼きて空青しこころ冷え  
 たる眞晝なるかな

## 夏の哀愁

次第に更けてゆく夏の眞中、しんと照り沈んだ眞晝などに何とも知れぬ哀愁を感じることがある。

非常に澄み入った心の閃きを見ることもあれば、唯だもうやるせない身體の苦惱を感じることもある。

梅雨雲の空にうつまき光る日はこころ石とも

冷えてあれかし

ほろほろと遠く尺八鳴り出でぬこの曇り日の  
 窓のいづれぞ

啼きまよひ鶯こそ一羽そらにまへくもり日も  
 われも流れ流るる

夏深いよいよ瘦せてわが好むつらにしわれ  
 の近づけよかし

わが顔は酒にくづれつ友が顔は神経質にくづ  
 れるにけり

おほいなるばいぶ買ひたし大いなるばいぶく  
 はへて睡りてありたし

わが皮膚に來て濡るる煤煙その如く獨りを悲  
 しむこころ燃えをり



指もてつまめば汗ぞしみらに光り居りはだへ  
 さびしや蟬なきやまず  
 くもり日になきやまぬ蟬とわがこころ語らふ  
 ごとく衰へて居り  
 向つ峰むかひにけふもしらじら雲い立ち照り輝くに  
 獨り居にけり  
 輝けば山もかがやき家も照り夏眞白雲わびし  
 かりけり  
 うららかに獨りし居れどうら寒きこころをり  
 をり起りこそすれ  
 夏草の花のくれなるなにとなくうとみながら  
 に挿しにけるかな  
 凶鳥まがどりの鴉群れなきこもりるの窓の晝空けぶり  
 たるかな  
 日のひかり紫じみて見ゆまでに空にとびかひ

なくむらがらす

早苗田のうへをめぐりて啼く鴉早苗萎ゆかに  
 なくむら鴉

みづからのいのちともなきあだし身に夏の青  
 き葉きらめき光る  
 土ほこりにまみれ疲れて風の畑の木かげに入  
 れば居たり青蛇  
 其處此處とつちの燃ゆるにかなしみて蛇はも  
 幹によぢ登りけめ

## 秋の歌

川口の沙魚釣

私のいま移り住んでゐるのは相模の三浦半島、東京灣に面した海岸である。右にも左にも眞白な砂



濱が續いて、かれこれ三四里に亙つてゐる。

その砂丘と、砂丘から砂丘に續いてゐる松林との間に出來た小さな漁村に、爲すこともなく暮してゐると、時々耐へ難いさびしさと所在なさに襲はれることがある。そんな時、私はよく近所の小さな河に魚釣に行く。

小川は松の茂つた砂山の蔭に淵のやうに淀んで、やがて砂の間を深く縫つて海に注いでゐる。大きな上げ汐の時にはその淀みまで汐がさして來る。その淀みの岸の蘆の深みにゆつたりと腰を下して糸を垂れてゐると、沙魚や鮒などの小さな魚が面白く釣れるのだ。

蘆の深みの眞向ふには右に云つた松林の砂山があつて、静かな澄み入つた秋の日光が青黒い木立にいいんと照り沈んで居る。一心になつて釣つてゐたのが、ふとどうかしたはずみで心が逸れて浮きかから眼を離すと、急に四邊のさびしいのに心づく。身體のめぐりはたけ高い蘆ばかりで、背後を見返ると深い竹藪、眼の前には淀みと松山と日の光とがあるばかりだ。その時再び心づかれるのは、浪のひびきだ。それは前面の松山を越えて聞えて來るのだ。

何といふことなく平常聞き馴れてゐる浪の響に心が惹かれてふらふらと立ち上ると、釣竿をそのままにしておいて蘆を分けながらその濱の方へ歩いて行つた。海は白々と輝いて、續きに續き、波は岸に碎けてゐる。浪の間にごろ／＼がら／＼と浪にもまる、石の音も聞えて居る。

その時に詠んだ歌。

秋の濱かぎろひこもり浪のまにまに寄り合ふ  
小石音斷たぬかな

秋の日かげ濡れし小石に散り渡り寄せ引く浪  
を見つつかなしも

風の音身にこたへつつ砂山の蔭にかがみて秋  
秋といひし

白砂に穴掘る小蟹ささ走り千鳥も走り秋の風  
吹く

芝 山

どうかすると、居るにも居られぬやうな、静かな日に出あふことがある。秋に特にそれが多いやうだ。

仕事は手につかず、他は勿論妻子にすら逢つてゐるのがつらい。そんな時、私はよく手籠に酒と土瓶とを入れて附近の小さな山に出かけてゆく。山は雑木林の山で、



小さな半島だけにそれに登れば四邊の田や畑や、人家や、遠く近くの海原を見渡すことが出来る。大きい深山の静寂や森嚴は無いが、どことなく親しみやすい明るさを持つて居る。

其處の程よき場所を選んで、隣寸をすつて火を作り、青い枝を切つて地にさし、酒をうつした土瓶を、それに吊つて火の上にさしかける。火は次第に燃え、酒は漸く強い匂ひを四邊の木立の間に漲らす。木も匂ひ、火も匂ひ、地も匂ひ、風も匂ひ、やがては照り沈んでる日光までが酒と同じ匂ひに染まつて来るやうだ。

静心しづまりかねつ酒持ちて秋山さして出で

ゆくわれは

静心人目をいとひ秋山の榎葉もみぢの根を踏

み登る

妻にさへものいふ惜み静心たもちこらへて秋

山に來し

酒煮ると枯枝ひろふに落葉鳴る落葉鳴りそね

山は恐し

獨りなれば躬ながらわれの尊くて居つたちつ

酒を焚きたぎらかす

榎山の下葉もみぢにときをりに風渡りつつ酒

煮え來る

額に觸るる榎葉のもみぢつみとりつ唇にふく

みていふ言葉なし

酒飲めばこころは晴れつたちまちにかなしむ

來りかしこみて飲む

曼珠沙華

秋の彼岸が來れば咲くといふわけか、曼珠沙華のことを普通彼岸花といつて居る。細長い莖のさきに火花を散らしたやうに眞赤に咲き出づるこの花は、いかにも彼岸のあとさき、秋の風のそよぐと吹き立つた田畑の畔などに眼覺むるばかりに見出さるゝのだ。咲く時季が時季のせるか、そんなに強い色を持つた花のくせに、私にはいつもそれが淋しくのみ眼にうつる。

その花がいま私の住んでる海岸の松林の下草に群り咲くのを發見した時は私は随分驚いた。今まで藪蔭か田畑の畔の半ば枯れか、つた雑草の中に混つて咲くものとのみ思つてゐたのが、眞白に風に



吹きさらされた砂丘の上に眞赤に散らばつて咲いたのだから驚いたのも無理はない。

左の數首がその時の作だ。その日は風が非常に強かつた。そして、よく晴れてゐた。吹き上げられた砂が針のやうに顔に當つて、ともすれば身體まで吹き飛ばされさうだ。充分には呼吸もようしないやうな氣分が、どこか數首の上に傳はつて出てゐるやうだ。

風に靡く徑の狭さよ曼珠沙華踏み分け行けば

海は煙れり

砂山を吹き越す風を恐ろしみ眼伏せて行けば

燃ゆ曼珠沙華

砂山のばらばら松の下くさに燃え散らばりし

こは曼珠沙華

眼鏡かけし何か云ひかけ見かへりし曼珠沙華

の徑の瘦せほけし友

鬮煮る大釜の火に曼珠沙華あふり揺られつ晝

の浪聞ゆ

一心に釜に焚き入る漁師の兒あたりをちこち

に曼珠沙華折れし

木 槿

曼珠沙華と前後して木槿が咲く。

この花について左のやうな文章を書いたことがある。この花は盛りが永いので、歌もいつといふとなく、ぼつくと出來たのを集めたのだ。

道ばたの木槿は馬に食はれけり

土用が更けて、しんと照り沈んだ日中などに不圖この句を思ひ出すことがある。または、土ほこりを浴びた路傍のこの花を見付けて慄へるやうにこの句を思ひ出すこともある。深げに見ゆる夏のうしろに忍び寄つた、明らかな、鋭い、そして寂しい秋のすがたがいかにも鮮にこの一句に出てると思ふ。貞享元年の八月に芭蕉が江戸を立つて大井川を越えてからの吟で、『眼前』ともまた『馬上吟』とも題してあつたといふ。

この六七年來、毎年一度はこの句を思ひ出す。そして、噫、またこの句を思ひ出す時季が來たのかといつも思ふ。今年も既にそれをば味ひ過した。この近傍にはこの花が別して多いやうだ。



濱街道住むとしもなき假住の籬根の木槿さか  
り永きかも

籬越しに街道を行く人馬車見居つつさびしむ  
らさき木槿

たまたまに出でて歩けば其處の家彼處の籬根  
木槿ならぬなき

魚買ふと寄りし藁屋の軒深く魚の匂ひて木槿  
窓越しに

さびしきはむらさき木槿花びらに夏日の匂ひ  
消えがてにして

この濱の不漁の續くや風よけの窓邊の木槿む  
らさきぞ濃き

南吹き西吹きて浪の遠音さへ日ごとに變り木  
槿咲き盛る

ところがらならぬ玻璃戸に風ぞ吹く木槿に晴

れし日の續きつつ

砂ほこり吹きまきし風の夕風に玻璃戸は重し  
木槿輝き

降り立ちて砂ほこりせる花木槿しみじみ見え  
ば勞れたる身ぞ

友を戀ふ歌

これは別に秋の歌といふではないが、作つたのは秋であつた。

北の國、西の國、離れぬになつてゐる友の誰にも彼にも久しく逢はぬ。元氣のいゝ連中も居ないと見えて、かんばしい手紙一本よこす男もありはせぬ。さう思へば思ふほど、逢ひ度さが募つて來るが、サテ、逢つたところで昔のやうに打解けて隅から隅を打ち出して、物語るやうな若い心の者もなくなつたであらう。それにしても一度打ち寄つてゆつくり酒でも飲みたいものだといふ時の作であつたと思ふ。拙い歌だが、さうした心は今でも心の何處かに燃えて居る。

木犀の匂ふべき日となりにけりをちこち友の

住みわびし世に



笑顔泣顔さらぬげにただ見合ひつつ夜明けて  
もなほ酌まむとすらむ

秋のこもり居

朝、起き上つて戸を繰ると寢衣の肌<sup>ねまき</sup>に吹き込む風が何といふことなく身にしみて、いつ散つたとも  
知れぬ木の葉が庭に散り敷いてゐる。さうした朝夕が次第に重つて秋の更けたのが眼に見えてわかる  
やうになると、私は殆んど毎年のやうに妙に考へ込む癖がある。今まで何の氣なしにばい、とやつ  
てのけて來た自分の舉動、さうしながら續いて來てゐる自分の現在、さうした種々のことが何だか急  
に事新しくはつきりと頭に浮んで來る。そして批判したり玩味したりしてゆく多くのことが殆んどみ  
な悔恨となり、咒咀となつてゆく。

わくら葉の青きが庭に散りてあり朝はひとみ  
のわびしいかなや  
思ふままにふるまひてさてなりゆきを見むと  
思ふに心つめたし  
死を思ひ樂しむは早や秋の葉の甲斐なきごと

く甲斐なかりけり  
われならぬ人居りてけふもわが如くわびしき  
事をしてゐたりけり  
とりとめて何も思はぬ時おほし葉の散るごと  
きわが身なるらん  
ふかきより浮び出でつつ心ややあらはになり  
て悲しみてゐる  
髪<sup>かみ</sup>の毛のひとつひとつがよごれゆくごとき淋  
しさ身を去りかねつ

冬の歌

雪來る

國境の遠い山々にほの白く雪の來る頃、私はこの晩秋初冬の季節に次第に親しみを覺えて來た。落



葉をかき集めて火をつけた煙の靡いてゐる郊外の村などをぶら／＼と歩くのも静かな心地だが、室に籠つて窓さきの日光に親しんでゐるのもなつかしい。

二首、いづれも舊作。

いと静かにものをぞ思ふ山白き十二月こそゆ  
かしかりけれ

甲斐が根に雪來にけらしむらさめのいまは晴  
れてなうち出でてみむ

落葉

晩秋初冬をなつかしむ心持はやがて落葉をなつかしむ心持となりやすい。惶しい外界を主なる対象としてゐた春や夏や秋の半ばが過ぎると、自然に心の瞳は自分の内の方へと向つて來る。われとわが姿を見入るやうに、心は心のみと親しまうとして來るのである。そしてさうした季節のさきがけとなつて私の眼に映るものは落葉である。

單に落葉をするといふその事がなつかしいのか、落葉する季節がなつかしいのか、落葉の歌は私にはかなり多いやうである。舊作と思はれるのから順次に引いて見やう。

われ生れて初めてけふぞ冬を知る落葉のこころなつかしきかな  
いかにせむ胸に落葉の落ちそめてあるが如きを思ひ消し得ず  
かへり來よ櫻黄葉の散るころぞわがたましひよ夙く歸り來よ  
ことごとく落葉しはてし大木にこよひ初めて風のきこゆる  
晴れわたる空より木より散り來るあゝ落葉のさまのたのしさ  
身を起しまた忍びやかに歩みいでぬ落葉ばやし奥の木の間を  
手ふるればはらはらはらと落葉す林のおくのひととも稚木  
かへり來て家の背戸口わが袖の落葉松の葉を



はらふゆふぐれ  
 長月のすゑともなればほろ／＼と落つる木の  
 葉のなつかしきかな  
 火の山の老木の樅のくろがねの幹をたたけば  
 葉の散り來る  
 眼の前に散りし木の葉に惶しくもの云はむと  
 し涙こぼれぬ  
 木の根に落葉かき敷き手をあつるわが廣き額  
 のなつかしきかな  
 すがれつつ落ちゆく秋の木の葉よりいたまし  
 いかなわれの言葉は  
 おほらかに風なき空に散りてゐる木の葉なが  
 めて窓とざすかな  
 風もなき秋の日一葉また一葉落つる木の葉の  
 なつかしきかな

秋の葉の日に光るかなひそひそと急ぐは早や  
 も散りしきりつつ  
 玉に似てこころふとしも静まりぬ路傍の落葉  
 踏むに耐へむや  
 わが行けば落葉なり立ち細溪を見むと急げる  
 心さわぐも

冬の山

落葉を戀ふる心はまたともすればその落葉の深い山かげにあくがれてゆく。實際、何か忙しい仕事などしてゐる時でも、ふつとこの真冬の山のことを思ひ起すと矢も楯もたまたまらぬやうに戀しくなつて來る。ちやうど、さういふ時ふらりと信濃をさして出かけて行つたことがあつた。その時の歌數首。

おなじくば行くべきかたもさはならむなにと  
 て山へ急ぐこころぞ  
 問ふなかれいまはみづからえもわかずひとす  
 ぢにただ山のこひしき



さびしさを戀ふるところにうづもれて身に事  
もなし山へ急がむ  
山戀ふるさびしきところ何ものにめぐりあひ  
けむ涙ながるる  
山に入り雪のなかなる朴の木に落葉松かちまつに何と  
ものをいふべき

## 冬の海

山に限らない、海さへ冬はさびしい、静かなものである。もつとも之れは東京灣の入口に當つてゐる静かな海である。私はその海邊に静かな冬を二つ過した。

おほよそに見し海ぎしの芝山の冬近づくと黄  
葉ちしにけり  
濱につづく茅萱ちがやが原の冬枯に小松まじらひわ  
が遊ぶところ  
眞冬日のひかり乏としき細海ほそうみに漕ぎ出る船のか

ぎり知らずも

向ふ岸安房の國邊の山かげに一むら黒き釣舟  
のかず

横濱に入り來る船か煙あげ入日の崎を廻り浪  
見ゆ

## 時雨

時雨ときりが非常に好きなくせに、どうしたものか時雨の歌が少い。しかも、林や山の時雨でなく、僅か  
にあるそれらは悉く屋内でのそれである。冬の夜、獨りで起きてゐることの好きな癖が偶然この數首  
を作らしたのかも知れない。

その一。

こよひまた眠られぬ身に凍みひびく冬の夜雨  
は神のごとしも  
夜の市街もわが身もいとど凍みとほり氷れと  
ごとく時雨降るなり



その二。

望ちかき夜にかもあらめ時雨ふり籠りて聞け  
ば浪のゆたけき

## 冬の夜

その一。

火を断たじ沸湯たたじとつとめつつ或夜さび  
しく起きてるにけり  
わがそばに火ありて水を煮るを得べし玻璃の  
うつはに水も満ちたり  
消すまじとこころあつめて埋火に向へる夜半  
を雪凍るらむ

その二。

とりとめて物思ふとにはあらねども夜半獨り  
居るは樂しかりけり  
つま子等が寢くたれ床を這ひ出でてともし搔  
き上ぐる冬の夜の机  
箱の隅の粉炭つげば何の枯葉かまじりて燃ゆ  
る匂ひするなり  
長火鉢にひとりつくねんとよりこけて永き夜  
飽かず思ふ錢のこと  
棚の隅あさり探して食ひものに鼻うごめかす  
冬の夜の餓鬼



批評と添削

Faint, illegible text on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

Faint, illegible text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.



世帯と茶屋

序

すべて實地の作例に就き、小生の意見感想を述べて作歌上の参考に資したい希望から本書を編んだ。單に参考といはず、本書を読む事によつて歌に對する興味の深まる様にとの願ひも籠つて居る。

本書に輯めた文章の多くは一度雑誌『創作』に掲げたもので、本誌とか本號とかいふ風の言葉の出て來るのなどはそのためである。文中引用せる作例の歌はすべて小生の主宰せる歌の結社創作社々中の人の作から引いた。作者の名はすべて略いておいたが、かれこれ二百人ほどの人の歌が論議せられてゐる。

多くはその場その場に書きすてたものを輯めて謂はゞ杜撰なるものであるが、我等と同じく歌の道に入らうとする初歩の人々にとつて多少の刺戟ともなり手引ともなつて呉れ、ば難有い。

大正九年九月 駿河沼津の在にて

牧 水 生



うまいの拙いのはいふもの、要するに眞實の歌の出来る第一の要素はその作者が自ら營む生活に對して如何に熱心であるか忠實であるかに係つてゐる様である。自分の生命を追求し、欲求する力が強ければ強いだけ、性質や器用不器用の差によつて表はれる形や色彩には種々あらうが、根本に於て動かす事の出来ぬ強みをその人の歌は持つてをる。つまり、自分の生命、自己の生きてゐると云ふ事に常によく目をとめてゐる人、尙ほ其處から進んで自分みづから自分の生を營んで行かうとする人、それらの人たちから僅かに眞實の歌が生れて來る様に思ふ。これには意識してさうやつて行く人と無意識の裡に自然にさうなつてゐる人との兩様がある様である。例へば萬葉集時代の作者はその後者に屬し、我等現代人の多くはどうしても前者に屬し勝ちの様である。即ち意識して自己の生を營んで行かうとする部類に屬する様である。

## 歌についての感想

### 生命の欲求力その他

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が散見する）



そして普通「歌を作つてゐる」といふ人たちは多くは眼の前に見せられた「歌」といふ藝術品の魅力に釣られて、何だか知らないが自分も作つてみたくなつたといふ調子で殆んど無意識の裡に一種の物真似をしてゐるに過ぎない様である。さうしてゐるうちにその既成の藝術品——「歌」から刺戟せられ啓發せられて無意識ながら前に云つたと同じ様な、即ち自己の生命の欲求力に促されて作るとほゞ同じ様な傾向を生ずる事がある様である。が、謂はゞそれは偶然な、間接な結果に過ぎない。従つてさう云ふ所から自己の才能のあるに任せて（才能のある人は）徒らに形式の整頓若しくは裝飾に腐心する様になり易いのだと思ふ。斯くて極めて全身的な、靈的な爲事であるべき所から移つて眼さき手さきの爲事となる様になるのである。自然「歌」といふものが「自己」と直接でなくなり、机の上雑誌の上のものとなり移つてゆくのである。さうして次第に「楽しみもの」「慰みもの」の端となつてゆくのである。

よく世間で生活を二つに分けて靈と肉との兩様から成り立つてゐる様に云ふ。そしてその肉の方面の欲求にかけては各自漏なく熱心である様だが、一方の靈の生活に對しては一般に極めて漫然たるものが多い。知らず／＼その欲求が心に萌して來ても多くは見えて見ぬふりをするか乃至は力めてそれを押しつぶさうとする人が多い様である。どうしてさう云ふ傾向になるか、據る所もおほいであらうが肉の方の生活に追はれるとか、一種の懶惰からそれを追求する事をやめるとか、さはらぬ神に崇なき

安逸に耽るとか、いづれさうした原因などから起つてゐるに過ぎないと思ふ。そして、それらをなす根柢には矢張り「無知」が横はつてゐるに相違ない。自分の生活、唯一絶對の自分の生活、それに對して多少の了解を持ち始めたならば到底さう暢氣に過してゐるわけには行くまいと思ふ。

さう云つたからと云つていきなりそれが具體的に一首々の歌に詠み出でらるべきではないが、要するに歌を詠む最初の態度を斯うときめて置く必要があるといふのである。即ち各自の生活と歌といふものが今少し直接にならなくては駄目だといふのである。「歌を作る」といふ事を片手間の爲事とせず、上品な氣の利いた慰みとせぬ様にしてほしいと云ふのである。この問題は最も直接に各自が朝夕の上に係りつゝ遙かに一生に通じてゐる事であるのだ。

○  
村夫子といふ言葉の故事來歴をいま私は知らぬ。中學で漢文の先生から教はつた様な氣がするが、思ひ出せない。然し、村夫子といへば直ちに或る種の型を持った人物を想像することは出来る。村での物知りで、小さなお天狗で（わるく云へば井戸の蛙で）憤りつぼくて、多くは好人物でよく細君の尻に敷かれてゐる——さう云つた人物をだ。そして私は折々おもふ、どうも創作社にはこの村夫子式の歌よみが多くはないかと。

もの知りの程度も多くは時代遅れのそれである。遠目には見ても現代の生活に觸れやうとせぬ。觸



れぬどころか確と見定めて調べて見る事をもせぬ。彼が持つ聰明には何等能動的の力が伴つてゐない。即ち自己の聰明を外に動かすだけの活氣を缺いてゐる。たゞ退いて守る、君子危きに近よらぬ種類のそれである。そして兎もすれば雲を南山の麓に眺め菊を東籬の下に探るといつた風の彼等の先輩であつた村夫子の遺して行つた享樂法を取つて人生全しとしゃうとする。自分から欲して享樂しやうとするのでなく、與へられたる習慣と形式とに従つて無意識にその中に赴いて安座するのである。而してさうする事を自己獨りのみが能くし得る一大事業の如くに不用意にも考へ込んで極めて安價な驕慢を持つ。そして、私のみる所では、さうした中から當人甚だしい、氣持になつて歌といふものを作る——と云つたところがありはせぬかと思ふのだ。

さう云ふ種類の歌には多くは歌の周圍に古固い殻がくつ着いてゐる。歌はれた喜びにせよ悲しみにせよ、すべてきまり文句の型に入つたものである。そしてそれらの歌は作る人にも讀む人にもお互ひの生活に何等の直接さを持つてゐない。たかゞ朝夕の盆栽の代りに見て楽しむ位のところである。

○  
 女人の或る種の人は進むとなれば實に速かに進む。添削をしたり批評をしたりするにも斯の種の人を相手にするほど張り合ひのある事はない。効果がめき／＼と眼に見えてゆくからである。が、さうした人は或る程度まで進むと多くはびたりと停つてしまふ。そして一度停つたとなつたら

一向もうそれ以上には進まない。即ち押せども突けどもいつかな動かぬ形となるのだ。どうしてであらうかと常に私はその事を考へてゐる。いま我等の仲間には割合に多くの女流作家がある。そしてそのいづれもがいま頻りに向上の途にある。どうか限りなく／＼進み進んで、右いふ固定状態に陥らぬ様に祈りたいものである。

## 夜話

病みついてゐるた兄妹のうち、初め危険がられてゐるた妹の方がさきに起きられるやうになつた。或日、床から出て来て、臺所に近い茶の間の隅にべとりと坐つてゐるたが、何を聞きつけたか疲れ果てた眼を幾らか輝かしながら、

『ホラ鳴いてる、キイヤー、キイヤーつて』

なるほど、臺所の流しもとあたりに蟋蟀が鳴いてゐるた。水甕の蔭にでもゐるのか、靜かな晝さがりを極めてかすかに折々思ひ出した様に鳴いてゐるた。

この四歳になる病みあがりの子供の耳を澄ました姿を見て思はず私は涙ぐましい氣になつた。なんと云ふ靜かな姿であつたらう。



我々が自然を見る時、或は聴く時、どうかすると斯うした静かな自然な、姿になる事がある。しかもそれは極めて稀な事ではあるまいか。

○  
地味のせるか、私の今住んでゐるあたりには桐が澤山植ゑられてある。私の家の窓からも、縁からも臺所からも圃からも、到る處に眼につく。近くに見てゐるうちに段々この木が好きになつて來た。幹や枝やその木質も好きだが、葉はことにいゝ。ばかばかしいほど大きくて厚くて、色は純粹でそして脆い。この頃、この葉が頻りに落ちる。庭にも、門の前の小徑にも、新しいの、散つて居るのが朝々眼につく。

風を感じ、季節を感じ、およそこの木位る感じ易い樹木は無からう様に思ふ。自然の變移がその一本の木に實にあり／＼と見えて行く。どうかしてこの親しい樹木を充分に歌つて見たいと思つてゐるのだが、どうしても出來ない。やはり此の木と同じく飽くまでも自然に飽くまでもすなほに、そして感じ易くならなくては駄目なのかも知れない。

○  
もう刈られたらうが、ツイ先頃まで附近の郊外に出かると到る所に蝦夷菊の花が眼についた。黍や葱や陸稻などに隣つて矢張り大きな畑に作られてゐるのだ。満開の頃はその畑一面が眞紅の花で埋

つて目が覺める様であつた。市中で賣つてゐるのなどを二三本手に取つて見れば何んだか造花くさい下品な花で、今まで私の嫌ひな花の一つであつたが斯うしてみづ／＼しく畑に咲き盛つてゐるのを見ると、またまんざらでも無い様に思はれて來た。幾度もこの花畑の側を通るうちに一つ二つとその花の歌が出來かけたが、どうも氣に入らない。で、或日わざ／＼手帳とペンを持つて其の畑へ出かけて行つた。その畑はまだ新しく開墾されたものらしく、小さい流に沿つて、畑に隣つた荒地には鐵道草などが茂つてゐた。

○  
その荒地に坐つてかなり長い時間を過した。歌は思ふ様に出來なかつたが、然しい、心持の時間であつた。こまかに見てゐると花や葉の色や形、またはその根の土などに今までに知らぬ親しみを感ずる事が出來た。こちらから親しんで行けばゆくだけ、自然は我々に親しみを寄するものである事を此頃しみじみ感じてゐる。

○  
或る日、或る雑誌の記者が來て、月の歌を十首、明日の朝までに作つてくれといふ。亂暴な話だが安受合に受合つて兎に角原稿紙を擴げてみたが一向に出來ない。

○  
その夜は月夜であつた。これ幸ひと庭に出て空を仰いでゐるうちに、いつか歌の事など忘れてしまつて、實に久しぶりに、少し大きく云へば生れて初めて見るやうな氣持で、心ゆくばかりその夜の月



に眺め入る事が出来た。

月だの星だのと云ふものまで、我々はおほかた忘れて暮らしてゐる様に思ふ。

○  
 繪畫の季節になつた。見ずにしまふのも心残りで、忙しい時間を割いて院展にも二科にも一寸行つて見た。たまらないと思ふほど好い作も見當らなかつたが、矢張りちよいちよい心を惹かれながら見て廻つた。何しろ数が多いので疲れるには疲れるが其處を出て來たあとの心は何といふ事なしに淨められてゐるのを感じる。其處が藝術の力だと思ふ。

畫を見ながら折々は歌のことを考へた。平常から『繪具が使へたら……』と思ふことの多いだけ、その畫の前に立つと思ふ事が多かつた。また、教へらるゝところも多かつた。

○  
 すぐまた文展が開かれる、出来るだけ丁寧に見らるゝことを諸君にもお勧めする。

○  
 昨年今ころであつた、私の發表した或る一連の歌に對し、三井甲之氏が批評した中に、こんどの歌の中には名詞止めに終つてゐるものが多い、名詞止めに終つてゐるものには多く理智で作られた歌が多いものだ、それがいけない、といふ風の意味のあつた事を記憶する。

なるほどその時の歌は幾らか強ひて作つた、頭で拵へた、即ち理智でこね上げたところがあつたの

である。そこへ同氏の批評を見たので、甚だ參つてしまつたのであつた。この事は今でも常に私の心に残つて、自分の作を見る時でも、他の作を見る時でも、よく引き合ひに出して考へて見る。そして今では一概に名詞止を否定するではなく、此處にまた一境地があるのだとも考へ出してゐるが、兎に角普通名詞止めの歌を見れば大抵無感動な、作爲的な、筋書き式のものが多い様である。

○  
 創作社にもかなり名詞止めの歌を作る人がある。或る人になると毎月々々過半がそれである。めいめいに自分の歌をこの見地から批判して見る事を希望する。

○  
 全然無感動ではないが、その感動にかなり不純なものや稀薄なもの、あるのを思ふ。不純なもの、多くは歌らしい、歌人らしい感動をすることである。或は一のものをも十の様に誇張することである。中には御芝居式の質感動をする人もゐる。これらの人の歌はその弊が直ぐ目立つて解るが、稀薄なものの方は一寸目に立たぬことがある。

○  
 稀薄な感動を稀薄なもの、様に現はしたのだからいかにも自然でよさ相だが、矢張りいけない。つまり初めからその歌の影が極めて薄い、あつても無くてもよさ相なものが多い。

○  
 斯うした歌を作る人も、また前に云つた名詞止の人と同じく一度か二度でなく、大抵一年を通じて同じいやうな心細い歌を作つてゐる。その歌を見ればその作者の影のうすいまぼろしが自然と眼の前



に浮いて出て氣味のわるい思ひをすることなどがある。

○ 不純なものは云ふまでもなく、稀薄なものやその他、この頃の歌の調子が極めて低くなつた。歌に少しも張りが無い。澄みが無い。

一首の初めから終りまで、凜として張つてゐるといふところが無い。一句々々ばらばらに挫折してゐるか、へなくに萎縮してゐる、若しくは空調子の空洞なものである。松の風が吹き澄んでゐる、その澄んだところが無い。

歌ひ上ぐると云ふ張つたところ、歌ひ澄ますといふ澄んだところこれらは即ち昔からいはれてゐる歌の調べである。景樹のいはゆる「歌は理ことわるものにあらず、調ぶるものなり」の謂ひである。

窪田通治氏はこの調べを書の筆勢にたとへて居られた様である。書いた文字は同一文字でも書く人によつてその文字に活きたのと死んだのが出来る。その筆勢、それが即ち歌に於ける調べであると。

○ 「ことわるものにあらず」のことわるといふのは斯うくだと説き明かす、斯うくだと申述べる、の意である。ところが多くの歌は大抵自分の心を直ちに歌ひ上ぐる事をばせず、大抵は斯うくだと説明してゐるのだ。その説明もまた一向に力のない、研えの無い説明が多い。

このしらべの張る張らぬは技巧の不備からも来るが、まことはその作者の生活の強弱に由来する。いはゆる影の薄い人からは影の薄い歌しか出来ない事になるのだ。また此處でいふ影の薄い人は決して病弱の人を指すのではない。獨歩にせよ、子規にせよ、透谷にせよ、啄木にせよ、みな病弱の人であつた。そして、何れもあつた張り切つた作品を残して行つた。私のこゝで謂ふのは、自分の生きてゐる事について何等の考慮執着を持たずして生きて行く人を主として指すのである。自分といふものの人生といふものに就いて何の知るところのない人、考ふところの無い人、さうした人たちに取つて此の自然が何であらう。人生が何であらう。同時にまた藝術が何であらう。

私はや、深入りして云ひ過ぎやうとしてゐた。全然自分の生命に就いて考へる事が無いとまで行かずとも、それを考へようとする努力の強弱、または自己の生に對する執着心の濃淡が自然とその生活力の強弱を誘ひ、それはまた直ちにその歌の上に反應して來るのである。濃きものは濃く、淡きものは淡く現はれて來るのである。

○ いのちの寂しさに耐へ兼ねて叫ぶ聲。よろこびに舉ぐる聲。それが即ち我等の歌でありたい。

私はまた斯うも思ふ。みづから舉げたその叫びによつてその寂しさはさらに鋭く、よろこびは更に深く、歩一步我等の生命の歩みに力を添ふるものが即ち我等の歌でありたいと。



## 青葉の窓より

おもしろいと思ふ歌が、一向に世に影を絶つてゐるやうである。面白いといふのに語弊があるならば、もつと生々しく身に沁む歌と言つてもいい。作歌者、若くは和歌研究家の間ばかりでなく、平の人間として親しみを感ずる歌の意味である。

うまいなア、と思ふ歌は或はあるかも知れぬ。なるほど、うまいことを言つてゐる、みごとなものだ、と思ふのには折々出逢ふが、そのために動かされる心の量は誠に僅かなものである。自身に歌を作つてゐればこそ感心もするが、でなかつたら何でもないほどのことが多いのである。また、或る趣味の上から或る種の歌に同感の出来る事もあるが、これとても唯だ微笑に値ひするだけのことである。

生地きぢのまゝの人間の歡び、悲しみ、寂しみを歌つたもの、よろこびかなしみさびしみそのものであるところの歌がほしいものである。言ひ得べくば、技巧などはどうでもいゝ程度に生々しいものが見度いのである。

眞物の萬葉の歌を讀む時、私は幾らかこの渴仰の満足を感じず。が、悲しいかな永い「時」が彼と私との間を距て、ゐる。生地きぢのまゝの歌であると承知はしてゐても、どうしても離れて取り扱ひたい氣が湧いて来る。その歌のなかに全身ををさめて満足してゐることが出来ない。

現代の、いま眼の前に生きて動いてゐるお互ひのよろこび、かなしみ、さびしみ、それがそのまゝに歌ひ度いのである。極めて微かである私ごときもの、生命のうちには、かなり眼に立つよろこびかなしみさびしみが動いてゐる。深く眞實に生きてゐる人のいのちにはどんなにかそれが大きく深く波打つてゐることであらう。なぜそれをそのまゝに歌ひ出して、聽かして呉れないのか。

かすかながらも人間といふもの、われといふものが自分の眼のうちに見えて来てからは、私は絶えずいろ／＼の絶望や寂寥や、または尾緒の無いよろこびやを感じて生きてゐる。大小はあつても、書き棄てられた幾十幾百篇の小説戯曲、若しくは繪畫彫刻の類には、片々とそれが溢れて、浮いてゐる。ひとりわが短歌にのみ、その影の見えぬのはどうしたものか。

歌には歌として永い間に結ばれた約束があるといふ。が、その約束は果して歌をして次第に人間世



界と縁を絶つてゆくために結ばれた約束であるのだらうか。歌の創立者、彼の萬葉集の作者たちは果してさういふ心でその約束の根をおろしたのであらうか。歌といふ約束、歌の境地や歌の形は人間のためにそれほど不便な、厄介な器物であるのであらうか。

理窟はいらない、また知りもしないが、兎に角私は前に云つた様な歌がほしくてならぬ。また、出来ねばならぬものであり、出来るものと信ぜられてならない。

實際、私の心はいま現在の歌に對して長い欠伸をしてゐるのだ。

芭蕉西行のさびを言ふ人がある。ありがたいものに私もそれを眺めては居る。が、其處に到り着く長い道程をおもふ時に私共はもう堪へがたい焦燥と、その反動の冷淡とを感じずには居られない。あまり遠くのことをば考へてゐるたくない。兎に角に眼の前のことを片づけてからにしたい。胸にこびりついてゐるこの惱ましきから取り除いて、大きなことも、遠いことも考へ始めたい。私には何よりも先づこの生の身が氣になつてならぬ。

歌に就いて斯うしたことを云ふにつれて、今更に不安を感じて來るのはこの身の處置である。ぼんやりとはしながらも絶えず私には自分の過去が思ひ出されて來る。これから以後のことも頭に上つて

來る。さうした時の悔と不安と苦惱と——、私は矢張り何は擱いても自分の眞實の生きかたを講究して行かねばならぬのを繰返して思ふのである。

## 桐の葉の蔭

### そ の 一

砂丘に立ちて沖見る海女の裾いと寒げにも靡く夕かな  
夕風に白帆孕ませすなどの船かぎりなくあらはれにけり  
かそかにも煙をながくたなびかせ機械漁船は歸り來にけり  
九十九里ここの荒海を走り來る機械漁船の煙なつかし  
赤き旗あをき新旗なびかせてすなどり船は歸り來にけり  
つきつきに水平線にあらはるゝすなどり船は限り知られず  
大船を陸にあぐると海女あまた波打際に入りけるかも  
鬮の聲をり／＼擧げつ海女あまた大漁の船引きあぐるなり  
波の音も消えなむばかり大漁にゆふべの磯の賑ひにけり



男どち船にすがりて女どち綱にすがりて引きあぐ船を

潮騒に入りつゝ、船を引きあぐる海女の裳裾のしとどなるかも

大漁の夜の濱邊のなつかしきかゞり火赤くそらを染めつつ

北見れど南を見れど九十九里引きあぐる船のかぎり知られず

(前號所載 三橋たかを)

これらの歌を読んで先づ快く感ずるのはその自由な點にある。わき目をふらず、たゞ一心に、自分の心に感じた儘を、歌はうとするところを、歌つてゐる點にある。いはゆる「歌臭く」ない所にある。讀んでゐて先づ心に我等も作者と同じ自由を感ずる。作者の心の開き心の動きが何等の障りなくいかにも心地よく我等の心に傳はつて来る。歌らしい美しい言葉や、持つて廻つた格調といふ風なものも無いが作者の感じた感動はかなり純粹に我等の心に通じて来る。いろ／＼の理窟をば別にして歌は先づ斯う行かなくてはならぬとおもふ。歌のはじめが即ち斯うであつた。

よく見ればこれらの歌にも缺點はある。先づ第一にまだ何處やら薄<sup>い</sup>ところがある。淺<sup>い</sup>といふ感じを持つ。不消化な所もある(よく知らないがこの作者は二十歳そこ／＼の小學校を出た程度の農夫であるらしい)。然し、徒らに深<sup>く</sup>、強<sup>く</sup>といふ概念を以て「歌」を作爲するより、生<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>、の<sup>の</sup>、心<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の此等の作品に對してまだ／＼私は深い尊敬を持つのである。此等の歌はいはゆる「歌」といふ垣

根に距てらるゝ、事なく心から心に通ふ或る廣い世界を持つて居る。讀者は心を平かにし、身體を豊かにし、極めて安らげく此等の作品に對する事が出来る。掌に取り、檢微鏡臺に載せ、咳一咳して覗き込む窮屈さを感じずに及ばぬ。あ、だ斯うだといぢり廻してゐるうちにいつか粉となつて飛んでしまふ様な——そんな事になりはせぬかと氣遣はるゝ様な不安さを持つ事なしに、何はともあれ先づ自分の心を打ち開いてそれに親しんで行ける親しさを覺ゆるであらう。慾はあるが、大體に於て斯うした行きかたを私は歌の上にとりたいと思ふのだ。

この歌の校正の出た時、印刷所の校正係の四十近い男が沁々とした聲で、

『斯ういふ歌ならば私どもにもよく解りまするなア』

と云つた。歌に無知な單なる校正係の故を以て、この言葉を蔑視する事を私は好まぬ。

生きの日のわがけふまでの闘ひは苦しきことに盡きたりしかな  
死ぬべしとひそかにおもふ人間の覺悟はいかに哀しからずや  
意地も棄て望もすてて死ぬべしと男泣きに泣く夜半の寢覺に  
何となく今日は朝より寂しくて醫者來る時の待たれぬるかな  
醫者待ちて胸をうたるるその音がわが樂しみの一つとなれり  
髪も伸び髻も伸びたる病人のわが貧相は生き恥さらし



身動きは今日ならぬとあきらめてベッドのそばの花見てありし  
氷囊を額に載せしつめたさの心よろしさに眼を瞑づわれは

(おなじく 山崎三春南)

これ等はどうかだ。

更に

はなばなしく降りしきりあし牡丹雪のいつかあた、かき雨となりつつ、  
空しろくうるほひわたり時ならぬけふ牡丹雪のこの里に降る  
あたたかき雨にまじりて降る雪のあまねき光そらに充ちつつ

(おなじく 潮みどり)

これ等はどうかだ。

街ひや、氣取りや、小手先や、乃至屁理窟をよせ。歌を、指さきに、ペン先に、机の上に、ノートの上に、若しくは俺は物識りだとおもふ頭の中に在るものと思ふな。唯だいつしんに自分の心を視よ、心の底を視よ、其處の清さを見よ、深さを見よ、其處にのみ歌は在る。眞實の歌は、唯だ其處にのみ在る。其處からのみ生れる。

要するに、心を絶対に純潔に持て。若しよごれてゐたらば何はにおいても純潔にせよ。その純潔の心を張り、強め、さうしてその心そのまゝに歌へ。何もその場合考へてをる事はいらぬ。

○

極めて正直に、心そのまゝの姿を歌は現す。謂ひ得べくば、作者そのまゝの人間を歌はあらはす。大きな心からは大きな歌が小さな心からは小さな歌が、静かな心からは静かな歌が、とり亂した心からは取亂した歌が、何もわからない心からは何も解らない歌が(歌でない歌が)偉人からは偉きな歌が、へなちよこからはへなちよこな歌が、實に可笑しい位る正直に出て来る。

歌は自分の鏡だ、と私はかつて本誌に書いた。近來ますますその感を持つ。作つた歌を見て、自身をかへり見よ、其處におん身はどんな感じを持つか。

楽しい新しい踴躍か、居耐らぬ慚愧か。その場合おん身は更に自身に對して、歌に對して、どんな處置をとらうとするか。みづから更に新しく生きようとするか、眼を瞑つて自ら殺すか。

一番困るのは何も解らないで解つた様な顔をしてゐる連中だ。少しでも歌が解つて來たら黙つて置いてもどうか斯うにかその人は自分で動いて行く。行かずに居られない。解らない連中は、要す



るに縁なき衆生だ。而して、歌を詠んで見ようと兎にも角にも思ひ立つた人間には何處にか歌の解るべき素質がひそんでゐるのだと私はおもふ。そして、解ると解らぬとは努力の差と、行かうとする方角の違いから生じて來ると思ふ。

○

解る、と一口に云つても其處にまた夥しき程度がある。小さな歌から大きな歌へ、へなちよこからさうでない歌へ、と進んで行く一步々々の道が實に無限であるが如くにだ。

私はこのごろつくつくさう思ふ、何だ彼だといふが自分等の現在、作つてゐる歌は要するに常に拙劣甚しいものだ。要するにそれらは向うに望んで居る所へ達しようとする道中のみち草に過ぎないと。向うに望んで居るもの、それは實に廣大無邊なものかも知れない。が、それは不思議にしみじみとして現在の身に見えて居る、感じられて居る。さうして一心に其處に向つて心は急ぐ。その道中に知らず／＼落して行くものはいはゆる現在の、自身の作だ。向うを望んで居る眼から、心から見ればそれは實に見苦しいものが多いのだ。

然し、要するにそれら見苦しいものも親しく自分の身から出たものに相違ない。それらを除いては現在の自身といふものは何處にも無くなつて了うのだ。僅かにそれによつて現在の自身を知るほかはない。その意味に於て私は現在の自身の作をいつくしむ。實にかなしくいとしく、二なきものとして

それをいつくしむ。

向うに望んで居るもの、それを手近に引き寄せる、自身からそれに近寄らずにこちらに引き寄せる術が無いではないかも知れぬ。それはたゞ「概念」によつてだ。引き寄せた、と思ふだけだ。向うにあるものは嚴として向うにある。いやでもおうでも其處まで自分等は自分の脚で歩いて行かなくてはならぬ。

恐らく死ぬまでこの歩みは續くべきものであるだらう。最後の一首を作るために現在無数の假作をなしつゝあるのだ、とも云ひ得るであらう。また、最後の一首とは、一生を通じて作つて來た作全體のことだとも云へるだらう。まったく、かりそめには出來ないと此頃しみじみ思ひ出した。

現在に甘んずる事もよくないだらうが、現在に絶望する事も私はとらぬ、若しそれ、めくら滅法に思ひ昂つて踏んぞり返つて「オレガ、オレガ！」と思ひ込んで居る人種に對しては、何と云つていか、私は全く言葉を知らぬ。

蚊遣香が盡きて、大分蚊が入り込んで來た。開け放つた窓先には大きな桐の葉が電燈を浴びていかにも青々と静けく垂れて居る。雨はあがつて居る。十二時十五分だ。

今夜は前號で眼についた歌を材料にして評釋風の座談を試みるつもりであつたのだが（前號にはい



ろいろな意味で佳い歌が多かつた。いつか妙な所へ話が逸れて行つた。とにかく、けふは此處で筆を擱く。

## その二

毎號の歌を讀んで見て私の最も不満に感ずることは一帯の歌がすべて申し合せた様に平板であることだ、單調であることだ。お互ひが少しも個性を持つてゐないといふことだ。

一つ／＼原稿で見てゆく時にはそれほどにも思はないが、一度活字に組まれて校正刷となつて現れて來ると直ちにそれが眼立つ。誰の作も彼の作も殆んど無差別で、よくも斯う同じ様なことが云へたものだと言ふ感心させられる事がある。今度『批評と添削』を書かうとして本誌前號を通讀しながら一層その感を強めた。試みに各自に於てそれ／＼の詠草欄に眼を通して見るがよい、寒心する所が多いであらう。

要するに解つてゐないからだ。各自が各自といふものをよう現はしてゐないからだ。イヤ、各自が各自を知つてゐないからだ。『歌』といふ一つの型かたのあることのみを知つて、たゞ其處のみに眼をくれて、『自分』といふものを忘れてゐるからだ。『自分』を歌はうとせずたゞ、『歌』を作らうとするからだ。だから百人寄つて作つても其處に現はるゝものは要するに一個の型にすぎずして、お互ひそれ／＼の

個性——そのためにこそそれぞれの歌がある筈なのに——といふものは全然忘却せられてゐることになるのだと思ふ。

お互ひあまりに無意識に歌を作つてゐる。歌の根元——即ち自分といふものに眼覺むることなしに唯だふら／＼と意味なき勞作を續けて居る、私のよくいふ眼ばかりや手さきばかりで歌を作つて居る。眼を瞑ぢ手をふところにし、徐ろに自分に親しむ、歌に親しむといふことを忘れてゐる様である。知らず／＼さうやつて居る。それで眞實の歌の出來やう筈は無いのであつたのだ。

歌の腰の据すつてゐないのや、よく云ふ指さきで少し磨つてぶつと吹けば直ちに消えて飛んでしまふ様な歌の出來るのなど、いづれも其處から出て居るであらう。少しでも眞實に『自己』に根ざした歌ならばたとへ技巧の不完全などはありとしても何處かに他から動かす事の出來ぬ或る力を持つてゐるものだ。本誌にもそれが稀にはある。たゞ、稀にあるのみだ。

○

個性の無い歌、乃至乏しい歌の別しても眼立つのはそれが風景を詠んだものである場合ことにはげしい様である。なんとといふへなへなした、お座なりの、あつても無くても同じ様な叙景の歌の多いことぞ。梅雨が降つて栗の花が咲いて梟が啼いてゐるとか、霧が流れて苗が植わつて蛙の聲が聞えると



か、風が吹いて松の木が揺れてゐるとか、其處らの襖の繪にでもあり相ないはゆる『い、景色』の歌が實に無數に並べてある。

叙景の歌の本意が若し『い、景色』を叙べることであるならば名所繪葉書に及ばない事蓋し遠いであらう。歌は何しろ形が窮屈だ、よい景色をなす所の物象の名前だけを並べたところで幾らも包含出來ない。其處へ行くと繪葉書は木から草から岩石溪流山岳雲霧花鳥人物の類をあの小さい面によく收め得るのである。

まさか誰もさうは思ふまい。が、結果は先づそんな事に陥ちてゐる。昨今行はれて居る叙景の多くの歌は單に人の眼を惹くに足る様な物象の名を配列したに留る程度のもの、みではないか。綺麗さうな、よき眺めでありさうな、謂はゞ思はせぶりな、乃至は單に道具立に過ぎぬ歌が多いのである。

叙景の歌は必ずしも『よき景色』の歌ではない。第一『よき景色』そのものが決して固定したものではないのである。須磨明石の箱庭式をよしとするもあらうし九十九里の砂丘一點張りをよしと見る人もあるであらう。三保の松原から富士の高嶺を仰いだからとて必ずしもよい歌が出来る筈のものはない。(卑近なことをいふ様だが、いろ／＼程度はあらうとも實際は大抵知らず／＼この流儀の人となつて居るのだ、大抵は『趣味』や『人真似』からい、景色らしいお座なりを云つてゐるのだ。)そんなものでは決してない。要はたゞその時眺めた景色がいかに自分の心を動かしたか、その景色に對し

て自分の心がいかに動いて行つたか、いかなる姿となつてその景色に對したか、その景色はまたいかなる姿となつて自分の心の中に浮んで來たか、其處である。景色と自分の心とが次第に融け合つて、洗練されて、其處に一つの新しい『自然』を作る、其處まで行つて初めてまことの叙景の歌が生れて來るのだと私は思ふ。決して單なる景色の説明や見取圖ではないのである。

斯ういふとたいへんむづかしい事の様に見えるが實際は何でもない。一つの風景に對したとする、そしてその風景に動かされた心はおのづから他の雑念を離れて澄んで來る、その澄んだ心に靜かに映つてゐる眼前の風景、それをそのまま、に(その儘にといふ處に技巧の巧拙が生ずるのであるが)詠み出づればよいのである。さうすれば其處には單に風景の模寫とも異つた一つの新しい風景が創造されて來るのである。

つまる所は『人』の問題である。小さな人からは小さな歌しか出來まいが、それでも右の様な相當の覺悟を以て作歌に従ふならばさう／＼下らぬものは作れないと思ふ。あまりに安つぱく取り扱ふ所から眼も鼻もあいてゐない怪しきものが出來て來るのである。ことにこの叙景の歌は作り易いとしてたゞ漫然と山川草木を——山川草木の名詞を並べ立て、歌だと思ふ人が多い。斯ういふ人に限つて歌の素をなす感動も何も無しに徒らに一首にまとめやうとする。感動なしに歌を作らうとするは心臓な



しに生きて行かうとすると同じである。

田兒の浦ゆうち出て見れば眞白くぞ不盡のたか嶺に雪はふりける

わかぬ浦に潮みち來れば潟を無み蘆べをさして鶴鳴きわたる

足引の山河の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲たちわたる

今更ながら斯うした歌を見てみると自づと襟が正されて来る。斯うなるともういはゆる『叙景の歌』から離れて一種崇嚴な神秘の境をさへ思はせらるゝのである。

○  
叙景の歌のことから思ひ浮べらるゝは『寫生』といふことである。一部の人は『寫生』そのものが既に歌の全てであり極致である様に説いてゐたかにも見えた。私は寫生は要するに『自然』の奥所に到らむとする努力の一階段であり、他方面から云へば作歌上に於ける手段の一つだと思つて居るのである。

『寫生』は斯くて靜かに『自然』に親しんで行く事を教へる。靜かにものに對する、對してその奥所を觀る事を教へる。取り亂した感激や、お座なりの述懐などは自づとそのために取り除かれる。思はせぶりや甘い感傷などに對してもまた然うである。

私の見るところでは本誌の歌には最もこの寫生のみちが缺けてゐる様である。今後出来るだけこの事を頭に置いて詠出上手法の確實を期し、主觀の透徹を計つてほしいと思ふ。然し、『寫生』は手段の一つである。寫生々々と凝り固まつて、角を矯めて牛を殺す様な、本を忘れて末に趨る様な弊に陥る事からは離れてゐなくてはならない。『寫生』を通して次第に『自然』の奥へくくとわけ入つてゆく様に、といふそれだけである。

### 虫を聴きつつ

○

個性の豊かな歌云々といふことを先號で書いた所、その個性といふのを「一風變つた歌」と解釋した人がある様に見える。

とんでもない事である。私の謂ふ意味は眞實にその人の人間性に眼覺めた歌といふことで、何もわざわざとらしい付け元氣の歌などをさすのではなかつた。つまりそのわざとらしさから離れたいばかりに云つた様なものであつた。

要するに歸する所は「人間」とか「人生」とか「自然」とかいふ大きな流れであるのだ。その流れ



に源を發してゐるさへすれば立派にその人の歌は個性に富んだものとなつてゐるのだ。その流れにもとづかずに中途半端ちゅうとはんぱからふらくと浮いて出た様な、根無し草の様な歌には正直にそれ／＼の人としての強みを持つてゐない、それを排するために先號私はあゝ云つたのであつた。語を換へて云へば本物ほんものでありさへすればよいのだ。無知や小才や物真似やなぐさみ半分で作らるゝ歌にはこの本物ほんものがあり得ない。大抵いゝかげんのまやかし物でありがちだ。従つて眞實にそれ／＼個性に富んだ歌があつたならば、その間には却つて堂々たる共通點があるのである。恰もお互ひが人間であるが如くにだ。風變りなものを作つて得意でゐたりなどすれば段々とこの個性の作、本物の歌から遠ざかつてゆくのみである。

○

いまましお互ひの生活に直接なもの、讀んでぴり、と響く様な歌が欲しい、と誰しもが考へてゐる様である。昨今の歌に飽き足らぬといふ人の殆んど全部が、さう考へてゐるのではなからうかと思はるゝ位である。

私もその一人である。然し、闇雲に慷慨悲憤してさう云ひ度くない。一體生活に直接なといふことからしてかなり種々な色どりや程度のあることだとおもふ。一本の木一莖の草を歌ふことが生活に迂遠で、錢や米や電車やを歌ふことが生活に直接であるとは私は思ひ度くない。近頃の所謂生活派とい

ふ人たちの力みながら歌つてゐる所を見ると其處に却つて生活と離れた滑稽味やばか／＼しさを感じさせらるゝ事が多い様である。死んだ石川君の作などは流石に何處から見ても、取材や手法の如何を問はず生活に直接であつた。彼は眞に内生活に眼覺めた人であつたからだ。本物であつたからだ。でない人が凡その概念や理窟や一種の新趣味でそれを眞似やうとした所で到底出来るものでない。理窟では出来ても、作物では出来ない。謂はゞ其處に藝術の難有さがあると云つてもいゝ位なものだ。

生活に直接な、といふことにはもつと根本的な要素があると思ふ。第一いまの歌は「自由」を失つて居る。みな大抵前こゝみになつて眼さき指さきにのみ力が集められ、靈魂の自由、生の力の自由、眼界の自由、手足の自由が全く忘れられてゐる。たましひそのまゝ、人間そのものゝ表現と云つた所が無い。見る方でも自然さうなる。自分全體でその歌に對することをせず矢張り指さきでひねり廻しながら見るといふことになるのだ。言葉や格調の上にまた取材の上に次第に斯くして窮屈に落ちてゆく様な所がある。詩歌は生活の不自由から逃れて自由を叫ぶがためにこそ歌はるべきものらしく考へらるゝのに、いやがうへにもその「不自由」の中に小さくなつて入り込みながらあくせくとやつてゐるのでは、まつたく「もう歌を見る氣がなくなつた」と云はざるを得ぬことになるのである。

與へられた歌といふものゝ「約束」から縛られずにそれを思ふまゝにこちらで驅使するだけの「自由」が欲しい。その自由さへあれば「約束」などはまた喜んで、そして極めて微妙に、こちらに驅使



せらるゝであらうと思ふ。それを彼等も待つてゐるのだと思ふ。それには先づこちらの生活から變へて行かなくては駄目だ。こちらの生活自身が既にものが小さくて、おまけに眼に見えぬ種々なものに縛られた様なものであつては、到底その「自由」どころのことではないのである。

結局、お互ひの生活が問題である。もつと生活に直接な歌が見たいものだ、といふその失望の聲それ自身が既にその人の生活の現はれであるのかも知れない。此處を考へずに徒らに他を罵つて快しとする舊型の村夫子式慷慨はチト安價である。兎に角さういふ失望乃至希望は今ではまつたく萬人普遍のものとなつて居る。而して誰一人まだその聲にそふ様な歌を作つて呉れぬ所を見ると、よく／＼のことであらねばならぬのだ。飛んだり跳ねたりの時期でない、もう夙うに實行の秋に入つてゐるのだ。我等の仲間も單に『創作』といふ世界のみに踞踏してうまいの拙いのと云つてゐる場合でないかも知れない。

○  
自由の極りに到つた處、自然の極りに到つた處に自づと「寂び」が生ずる。靜かなありがたい境地である。然し最初からその「寂び」を作りにかゝつてはそも／＼の「自由」を失ふことになる。「寂び」は畢竟生ずるもので、作るものではないと思へばよい。

### ひとり言

#### その一

輝け。

ひややかに輝くと、火のごとく輝くと、それはその人の本然に據る。

とにかくに輝け。

歌は輝くころよりのみ生る。

○

寂は輝の極りに沈みたるものである。

輝くことなくして、先づ寂をねがふ、愚及び難し。

○

自己を知れ。

否、修養書のいはゆる「自己を知れ」ではない、根本的に自分の生きてゐることを痛感せよといふ



のだ。

やがて其處に生命いのちのなやみは起る。

詩歌——すべての創作はその悩みから生る。云ひ得べくんば、純真無垢のころの輝きは其處から發する。

○ 自己を知らうとする努力に、讀書、思索、而して創作がある。

○ 全身的であれ。

井戸端會議式の不平や、いつの間にか狡猾な習慣の老婆から押賣せられてゐた趣味や興味や、若しくは不良少年式の小手先の冴えや、それらは殆んど作者自身眞實自分に關係のあることか無いことを危ぶむ程度のもが多いのだ。其處に何のひかりがあらうぞ。ありとすればそれは僅にガラス玉のひかりである。

自己全體を自然の前に神の前に投げ出して初めて其處に純真無垢の自然の光が宿る。謂はゞ、その光の發する時、われみづからが神であり、自然の表象であるのだ。

その光をすなはちわれらはわれらが歌に點す。

○ われみづからの小さき智慧にたよるな。

○ おのれを空しうしてたゞ神の前に立て。

○ おのれだにきよからば路傍の草にも神を見む。

○ おのれだにきよければ隨所に輝く歌を見る。

○ 友よ、歌をうたはむ。

○ わが生なまのあかしのために。

○ いのりのために。

## その二

○ 作歌に苦心する、また、苦心せよ、といふことをよく聞く。

○ 苦心は必要である。佳き歌を作らむがためにいやが上に苦心することは誠に必要である。が、苦心すればするだけ拙ちがい歌を作り上げる様では爲しやう様がない。



苦心する、苦心するといふその事を以て直ちに作歌道の妙諦であるが如くに心得、更にこれを他に吹聴するが如きは飛んだ事だと思ふ。

噛みつく様な、いはゆる苦心する、心持を以て歌に對するより先づ極めてのんびりした自然の心持を以て對する事を私は望む。歌を恐るゝより歌に親しめ、と思ふ。

歌、と聞いて五體を固むる結果が、次第に血の氣の無い、無機物の様な歌を製出するものになるのではないか。

○  
 水草の芽に降る春の雨の様な心持で、私は歌をうたひたい。その場合、水草は自分の心である。

歌は心から出るといふ。誠に心よりほかに歌のいづるところは無い。心から出ると共に、同時にまた心を養ひ育つる様な心持で次第に私は歌をうたつて行き度いものである。

○  
 自由で、長閑で、慈愛に満ちた歌、私はそれを歌ひ度い。

○  
 若し歌といふものが弓矢鐵砲隙間なくかけつらねた堅城であつたならば、私はたゞ遠く眺めてその側を通り過ぎる一旅客であるだらう。ましてや城を枕に討死うちじなどといふ勇士では、とてもあり得ない。

○  
 初めから解剖臺に載る心持で生れて來なかつたと同じく、初めから解剖臺に載る氣持で私は自分の歌をも作らない。

○  
 この骨が某博士の所謂何とかで、この筋が何の何だ、成程これは結構な組織で御座ると、冷え切つた屍體をさんぐに切り刻まれてほめられるより、何はともあれ飛んだり、跳ねたりする歌を作り度い。

○  
 萬葉集の自由、潤達、雄渾は何處から來たか。彼等もなほ歌は斯うした歴史ある形式だからとか何とか云ひながら、右顧左眄、苦心し苦勞して一首々々をこね上げたか。

○  
 我等は幸に歌といふ藝術創作上、手頃の愛すべき形式あることを知り得た。それでもう澤山だ。この形式をまつたく自分のものとして自由にとり扱へばいゝのである。授けられたる形式だと思はず、自分で發見したものだと思へばいゝのである。

○  
 萬葉集を讀むには、作歌上の辭典とせず、手本とせず、經典とせず、この頃の流行物とせず、また自己吹聴の具とすることなしに、唯だ雑誌の小説か何かを讀むつもりで讀むがいゝ。言葉がむつかし



いだけで、最も我等に親しい事が歌はれてあるのである。恐るゝな、親しめ。これを恐しいものにするのは、たゞさうした學者たちだけの爲事である。

### その三

割合に心の静かな場合に、ともすれば私の空想に上つて来るなつかしい景色がある。大きな山が、峰が、幾つか並んでゐる間の溪間から眞白な雲が滌々とち昇つてゐる所である。白雲岫を出づ、といふ古い句があるがあれよりもつと近い、親しい景色であつてほしいのだ。私の記憶からこれに類した實景を引き出さうとしても、なか／＼思ひ當らない。甲州の葦崎停車場を離れた汽車が信濃の諏訪境へ進み出すと直ぐ八ヶ岳の裾野の續きでゞもあるらしい廣大な雑木林の高原にかゝる。その雑木林を通して見る左手の山間、鳳凰岳とか地藏岳とか駒ヶ嶽とかいつたと思ふ、かなり大きな二三の山岳の間には殆んど必ずの様に白雲の屯してゐるのを見るが、それはただ溪間に靜かに凝り淀んでゐるだけで、徐々として立ち昇つてゐるといふのではない。

私はその景色を空想することによつて、自分の心の開くのを覺ゆる。萎縮してゐたもの、苦んでゐたものが、次第に解き放たれて自然に豊かに伸びて行く。吐く呼吸すら軽く豊かになるのを感じる。私は、いま、斯うした歌が詠みたいのだ。靜かに自然に立ち昇つてゐる雲、そのやうな歌が詠みた

いのだ。或は軽く、或は疎く、または種々なちひさな缺點があらうとも、とにかくさうした自然な、おほまかな歌が詠みたくてならない。

溪が靜かに巖を嚙んでゐる様な歌、檜の葉が一つ落ちるのすら聞えさうな深夜の燈下に唯だひとり一輪の黒のダリヤに向つてゐる様な歌、いろ／＼な歌が眼の前にちら／＼してゐるのではないが、何は兎もあれ、私はいまさうした自然な、とりつくるはぬ歌がうたひたい。

○  
君は君の向つてゐる地ちから聲の發するのを聞いたことはないか。さうだ、蟻が這つたり、日がさしたり、草が生へたりしてゐる地からだ。

僕はをり／＼ある。それと同じに樹木の梢からも、雲の光からも、めい／＼その聲の發して來るのを聞くことがある。

○  
そんなとき、自分は自分の身をわれながら尊いと思ふよ。

○  
雨が續いたり、曇つたりしても、秋はさすがに秋だ。旅のことををり／＼思ふ。

考へてみれば私は今まで三十年の間、かなりいろ／＼の山や川を見て來たわけだが、眞實、それに面して來たといふはつきりした記憶は、先づ殆んど無いと謂つていゝやうな氣がして來た。今までの



は、みな、うはの空で見えて来たのではなかつたか。

溪のずつと奥、露出した大きな岩と岩との間に懸つてゐる細やかな水を心から熟視したことがあるか。また、眞黒な岩にぶち當つて渦巻き立つてゐる海洋の浪を見たことがあるか。

果してあると答へ得るであらうか。

自然を愛するの、自然を見てゐるのと云つてゐたことの恥しさをこの頃頻りに感ずる。

○

或る日、客があつた。舊くからのわが社友で、或る山國の小學校の教師をしてゐる人である。初對面であつた。

その人といろ／＼の話をしてゐるなかに、彼は斯ういふ事を云つた。私は今まではゆる修養書といふものを一冊も讀んだことがない、歌の事を斷えず考へて居ればそれが自分にとつてどれだけ修養になるか解らない、と。

私はそれを聴きながら心の中で、ありがたい事を聞くものだと思つた。歌が修養になる、一寸聞けば變な様だが私は夙くからさうならなくては嘘だと考へてゐた。歌は要するに人そのものである。歌を見詰めてゐるといふことは自分の心即ちたましひを見詰めてゐることになるのである。自分の心(自分のいのちと云はうか)、それを斷えず見詰めてゐて初めて歌が出来るのだ。然うして見詰めてゐるものを少しづつ、でもよくして行かうとするのは、これは當然ではないか。

○

詠んだ歌に靜かに指を觸れて見よ。

何のさ、はりなしに、自分の心に觸れる思ひがするか、どうか。

#### その四

秋田の旅の歸り、信州の松本に泊つた第二日目の夜に、土地の歌を作る女の人たちが三四人、宿に訪ねて来て何か話をして呉れといふ事であつた。その時は夕方の酒の後で、私は大へん酔つてゐた。言つた事も無論酔つての上の言葉だが、中に斯ういふ一句があつたのを不思議に覺えてゐる。「歌をば自分の鏡だと思ひなさい」といふのである。

對手が女の人であつたために咄嗟の思ひつきで斯ういつたのだらうとも思ふが、まことに歌ほどその作者の面目をよく寫すものはないやうである。その人うまれつきの性格から、歌はれた其場の態度まで不思議な位の微妙に一首の上に表はれて来る。自分といふもの、生命といふもの、人間といふものに對する理解の程度、それに對する態度如何まで表はれて来るやうである。

歌を單に鏡だ、としてそれに對して心を動かしてゐるのも可い。更にその鏡面から靜かに奥に入つ



て行く心がけがあつたらなはい、だらうと思ふ。

○  
私の舊友で、ホトトギス派ではかなりの地位に居る或る俳人がある。今はどうだか知らないが七八年前同じ牛込区内に下宿して繁く往來してゐた頃、その友は下宿屋の自分の一室をいつも綺麗に片付けて、机の上に一本の線香を立て、その前に端座して句作に耽つてゐるのをよく見かけた。當時の私は、そんな馬鹿なことをして生きた句が出来たものと罵つてゐたものであつたが、然し、騒々しい下宿屋などではさうして心を静めるのも一つの手段であつたかも知れぬ。尙ほ單に手段とすることなく、さうした一縷の香の煙に全く自分の心を託するやうな三昧境まで入り得て、更にそれに對して思ひを凝すやうなことが出来たら一層い、だらうと思ふ。強ちに線香を要するまでもなく、心を澄ませば直ちに其處に縷々として立ち昇る自分の心、自分の生命を感じる様な境地にまで進めば尙ほありがたいことではないか。

閑けさや岩に浸み入る蟬の聲

あかあかと日はつれなくも秋の風

といふ様な境地はあらゆる自然の景象が私の謂ふこの香の煙をなしてゐるものと云つてい、かも知れぬ。

北海道函館の社友K——君から爲替券を入れて左の如き手紙が來た、ツイ先日の事である。

近來さつぱり歌が作れず。また歌が面白くなく相成申候。『創作』の歌を見てもどういふものか感動させられず、つまらなく存じ居り候、今少し人の心へ迫る様の歌欲しく候。それゆゑ『創作』も止めようかとも思ひ候へども先生とこのまゝお別れする事残念に候間又々繼續する事に思ひ直し候。

昨今の歌の面白くなく、一向に直接に人の心に響かぬ憾みをば私も本誌六月號かに述べて置いた。斯うした手紙を読んで更にこの感の新たなのを思ふ。

研究といふもの、盛んな時代にはその反對に創作は必ずのやうに衰へてゐるらしく思はれる。今は謂はゞその研究時代に屬してゐるのかも知れぬ。(と云つて、ろくな研究が行はれてゐさうにもないが)あ、でもない斯うでもないで、右顧左眄、自ら小さくなつてゐる形がめい／＼にある様である。斯くして歌の根本を成す主觀力が萎縮して各自に小さくちんまりと納つてしまつたのであらう。とにかく面白くないのは事實である。私は今度、「前月歌壇」風の批評を書いてみるつもりで何ヶ月か或は何年目かに短歌雑誌の重なもの六七種に眼を通さうと企て、あまりにその無味單調なのに驚いて、中止してしまつた。その以前から自分の雑誌の歌の拙いのを始終氣にして居たのであつたが、他のものを通覽するに及んで、これは決して自分のものばかり拙いのではないと思つた。思つたどころか、他



より幾らかい、ところがあるかも知れぬとまで思つた。これは多少色眼鏡であるかも知れぬ。でないかも知れぬ。いづれにせよ、他のことは先づ如何でもい、せめて自分等のだけでも、このK——君と同じ嘆聲を發せぬまでに押し進めて行き度いものである。少し眼のある人は、K——君ならずとも同じ感を持つてゐるに相違ない。どうかして一刻も速くそれをとり除いて了はうではないか。一人でも二人でも先覺者が出て來たらば、睡れる者も自づと覺めるであらう。作れなくなつてゐる人も、驚いて作り出すであらう。それに際し私は先づ云つて置く、世間の傾向などに決して眼を向くるなど。因循な、微温的な、村夫子風な、デレツタント風な所など斷じて排斥せねばいけない。先づ睡りより覺めよ、而して少し無茶だと思つても自分の思つた方向へ猛進して欲しいものである。

「それゆゑ「創作」を止めやうかとも云々」を讀んだ時私は實際暗涙を覺えた。難有う、未見の友よ、私は決して徒らには此言葉を聽かないつもりである。(九月下旬)

○

一人平均三十首として三百人の投書では都合九千首からの歌を見ることになる。丁度萬葉集を二倍した量に當る。之れを短時日の間に見て了ふといふ事は考へるだけでも可なり苦勞な仕事である。

で、山と積まれたのを前にして溢々ながら選にかゝるのだが、いつのまにか私は本氣になつてそれ等に對するのが癖である。上手下手、邪道正道の別はあつても、兎に角精一杯になつて各地それ／＼の人がみな自分及び自分の周圍に對する感傷や批判を述べてゐるので、いつの間にかわれ知らずその誠心に惹き入れられてゆくのである。(さういふ場合、ふざけたものや餘り下手なのに會ふとツイむきになつて憤慨もする。)

ことに今度は初號の事でもあり、八九分通り私には初對面の人であつた。一概には云へないが、初對面即ち初心者の人が多いやうであつた。而してその初心の人の作がいづれもみな眞面目な一本氣のものであるのを見てつく／＼嬉しく感じた。他の社に見られぬ、本社獨特のものであるが様にも思はれたりした。いろ／＼な新聞雜誌の投書欄を渡り歩いて所謂投書家氣質（たうしよかかたぎ）になり切つてゐる人の惡達者（わるだつしゃ）な氣取つた狡猾な詠みぶりを見ると眞實身ぶるひの出る様な不快を覺ゆるのであるが、今回はそれが一つも無かつた。どうか斯の素朴な正直な調子を其儘に次第に高く強く、且つ清くして行き度いものである。

正直な一本調子な歌にはその歌つてある事柄なり技巧なりの如何に係らず、何處にか眼に見えぬ力が含まれてゐるものである。

技巧その他、自分の思ふことを自由に、上手に歌ひこなすやうにならうとするには先づ讀むのが第一である。相當の地位に在る人の歌集なり何なりを熟讀玩味するのである。その間には自然に詠歌のこつといふ風のもものが會得せられるであらう。それと今一つは練習である。人にもよらうが、初めの



中は餘りかれこれ考へずに虚心平氣でどしどし思ふだけのことを詠みならしてゐた方がいゝかと思ふ。

三百人のうち、先づ二百七八十の人の作には多少に係らず戀の歌が混つてゐた。そしてその戀の歌に限つてみな拙かつた。

或人は戀歌を作らねば歌よみでない様に（若しくは一人前でない様に）心得て儀式的に作つてゐる風が見えた。或人はひとがする故われもしてみむ傾向を帯びてゐた。みな虚偽である。佳い歌の出来やう道理がない。或人はまた針ほどの事を棒程に云つてゐた。それは電車に乗り合せたきれいな人を見ても時に味な心地になるものである。あるからと云つてそれを、君を戀しぬ身も燃ゆるがになどと變な聲を出してみた所で誰も相手にしはしない。

中には眞實に戀愛状態に在つて作つてゐるらしい人もあつた。流石にこの種類の人の作にはやゝ見られるものがあつたが、要するにまだ微温的な、お芝居風な不徹底なものであつた。戀と云へば兎に角その人の生涯に於て重大な事件である。自他ともにこれほど心を動かすものは尠い、それと同時にこれほどまた玩ばれ易いものもない。眞實らしくは見えても、容易に人を動かすことの出来ない程度の戀歌は、要するにまだ戀を遊びながらの作歌であらうと思ふ。戀を遊ぶ、即ち自分の心を遊びながらの作であらうと思ふのだ。

### いろいろの歌と人

本誌投稿歌の中から、よしあしにつけ眼についた歌を引いて来て、座談を試みる。

教子の枢守りてしづくと魂消ゆるがに吾はゆくなり

亡き友を弔ふ子等の歌ききて人等なきつつ夕日はかげる

教壇に立ちて見やれば唯一つ空しき席に涙ながれぬ

成績を處理してあれば世を去りし教子の圖畫寂しく光る

これは或る小學の教師をして居る、假りにA——君と呼ばう、作者がその教へ子の死去を悼んでの詠である。しんみりした、少しも浮いたところのない歌ではあるが、どうも切實でない。しづくとと云ひ、魂消ゆるがにわれはゆくなりといふあたりの調子が、いかにも間のびがしてゐて、のんきなため、さう思はせるのではあるまいか。次の一首でも、人等なきつつ夕日はかげるも調子の上からも歌はれた景象の上からもいかにも悠長である。第三第四首は幾らか引き締めた印象が残るやうだが、これだとして涙ながれぬなどと大づかみに云ひ放つてしまはずに唯だ一つ出来た新しいその空席そのも